

けものフレンズ りゅにおん【完結】

家葉 テイク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間と動物少女の融和に向けた政策第一段階——『パビリオン計画』は大成功のうちに終了した。次は、その第二段階。人間がジャパリパークに設立された学校に通い、実際に学生生活という枠組みの中でアニマルガールと交流したときどのような事象が起こるかを測定する『リユニオン計画』が始まった。

主人公はパビリオン計画に参加していた一人の少女。彼女の目的は——あの休憩所^{パビリオン}で出会った友達との再会^{フレンズ}だった。

※アニメ『けものフレンズ』一周年記念作品です。

目次

その1：さいかい	1
その2：けいそく	10
その3：あいべや	18
その4：ぬきうち	27
その5：なかだち	35
その6：たくらみ	43
その7：あかてん	50
その8：つながり	57
その9：よびかた	63
その10：かちまけ	70
その11：せんぼう	77
その12：おねがい	84
その13：さよなら	91
その0・1 [^] —18…これから	99

その1：さいかい

あれは、私が中学生になるほんの少し前。

一二月から三月にかけてのあの頃、当時ジャパリパークで働いていたお父さんの都合で、私はジャパリパークの従業員居住区^{ロッジ}で暮らしていた時期があった。

ジャパリパークは、子どもにとっては夢の世界だった。色々なけもの達と触れ合える施設。けもの達のことを子どもでも知ることのできる説明。自然と、けもの達のことを大切に思えるような工夫。

子どもだった私はただ楽しい場所としか思っていなかったけど、少しでも大人になった今なら分かる。ジャパリパークは、とても素敵な場所だった。

中でも一番好きだったのは、当時新設されたばかりだった施設。ジャパリパークのけもの達が姿を変えた存在——『フレンズ』の暮らしを垣間見ることができ、『パビリオン』というアトラクションだった。

今やったら、多分いろんな批判が出てくるアトラクションだったと思うけれど——当時の私にとっては、パビリオンで遊ぶ時間がとても幸せな瞬間だった。

だってあの場所には——私の友達が、待っていてくれたから。

『彼女』との出会いは、私が初めてパビリオンに遊びに行ったとき。サバンナチホーの大地に、木のブランコを設置して、ほんの三〇秒くらいした頃だった。

『あら？、こんなところにブランコが……ああ、ぱびりおんだっけ？もう始まったんだ』

そんなことを呟いた、当時の私よりもずっと年上に見える女の子。外に開いた大きな耳、黄色に茶色のヒョウ柄模様が特徴的な可愛い服、縞模様の太くて短いしっぽ。多分……ネコ科。私にとっては、生まれて初めて見たフレンズだった。

私が置いたオモチャ、楽しく遊んでくれるといいな——そう思いながら目の前のフレンズを見ていたら、そのフレンズはブランコに手を当てるなり、こんなことを言った。

『はん、こんな中途半端な位置にブランコを置くんなんてシロートね。全然なつちやいないわ』

………恥ずかしながら、私はこのとき、途轍もなく……猛烈に怒った。

私が勝手に置いたんだから、それをフレンズが楽しんでくれなくても仕方ないことなんだけど……子どもだった私は、そのフレンズの言葉に一気にムキになってしまつて。

『わっ!? わわわー！ なにこれ、何よいきなり！』

カツとなつた私は、木のブランコを大量にフレンズの前に出していた。もちろんブランコなんてどれだけ出したところでフレンズにとっては困るようなことじゃないし、本当に『なんでもいいから私が怒ってることを伝える』という気持ちしかなかったんだけど……。

『……む。なるほどね、このブランコ……全部飛び越えてみせろつてこと?』

フレンズはそう言つて、一気に腰を落として、地面を足全体で掴むような姿勢をとる。それから、

『うみや………みやーっ!!』

そんな掛け声とともに、フレンズは目の前に並べられたブランコの隊列を、ひとつ跳びで跳び越えて行つてしまった。物凄いジャンプ力で……私は、怒っていたのも忘れて、フレンズの凄さにただただ感動していた。

きれいに着地をきめたフレンズは、得意げにあたりを見渡しながら、わたしにこんなことを言ってくる。

『ふふん。わたし、ジャンプ力には自信があるのよ。さあさあ、次はどんなものを出してくるの?』

……それから、当時の私はパビリオンの入場チケットの時間が切れるまで、ずっとそのフレンズと遊んでいた。

言葉を交わすことはできなかつたけど、そのフレンズの言葉に私は

色んなオモチャを並べることで答えることができた。そんなめっちゃくちやな意思疎通法だったけれど、うまく伝わらないもどかしさもあつたけれど……それが、逆にとても楽しかった。

『ん、もう終わりの時間みたいね』

夕日を照り返して黄金色に輝く草原の只中に立つスピーカーから、『けものみち』のメロディが流れ出す。

それが、その日の閉園の合図。その合図に紛れて、フレンズも私と同じように寂しそうな顔をしていた。

パビリオンは、あくまでフレンズの生活を垣間見るアトラクション。特定のフレンズと仲良くなるためのものじゃない。相手は自分が遊んだオモチャを設置したのが誰かなんて知らないし、私達ヒトも、同じフレンズがまた来てくれるかなんて分からない。

でも……今日一日で、私達はすっかりお友達になれたと思っただから。これで終わりになんてしたくないと思っただから。

だから私は最後に、『またね』って気持ちをあの子に込めて、目の前に木のブランコを置いてやった。

『……ぷっ』

一瞬びっくりしていたみたいだったけれど、フレンズはそれから堪えきれないといった感じで笑い出す。

それから、あの子はこう言っただった。

『ええ、そうね。また今度。アンタが来るの、待っててあげるわ。わたしはサーバルキャット。ルカって呼んでちょうだい。アンタの名前は——言えないか。じゃあわたしが勝手につけたげる』

んー、とそのフレンズ——ルカは少し悩んで、『……ブランコ。アンタの名前、ブランコね』

私は、返事の代わりにルカの目の前に大量のブランコを置いてやった。もちろん、『もつと可愛い名前がいい』っていう抗議も込めて。

の の の の の の

その1：さいかい

の の の の の の

それからというものの、私達は毎日のようにパビリオンで遊んでいた。

実際のところ、当時お父さんはジャパリパークで泊まり込みの研究をしていて、そしてジャパリパークはそんなお父さんの家族のために、ジャパリパークへの特別招待措置をとってくれたりしていた。

だから私は、開園時間になるとすぐにパビリオンに行って、ルカと日が暮れるまで遊んだものだった。推薦で中学への進学が既に決まっただけで、小学校も自由登校だった私は卒業式まで学校に行く必要もなかったし。……それに、私は休みの日も一緒に遊んでくれるような友達がいなかったから。

とても、楽しかった。

ルカとは相変わらずお喋りできなかったし、うまく意図が伝わらないこともあったけど、それでも探り探り色んな遊びを二人で一緒に考えた。ルカは意地悪なときもあったから、それでちよつと喧嘩することもあったけど……ブランコを置いたら、すぐに仲直りできた。

『ふふ。わたし達なんだか、すっかり素敵なコンビね』

ルカがそんなことを言ったときには、私も本当に嬉しくって、うっかりブランコをいっぱい出して呆れられてしまったり。

本当に、ずっとこんな日が続けばいいと思ってた。

——ジャパリパーク・パビリオンの意義は、サンドスターによってけものがヒトの少女に変じた存在・アニマルガール、俗称『フレンズ』を人間社会が受容する為の第一段階。

その目的は、四か月間のヒトによる『観察』とごく限定された範囲における『干渉』によって、ヒトがフレンズという存在を理解し、共感し、許容する為の下地を作ること。

それをアトラクション風に仕立て上げ、フレンズもヒトも楽しみながら実行できるように考案されたのが、『オモチャを置いて、それで遊ぶフレンズを眺める』という『ジャパリパーク・パビリオン』だった。

期間は一二月から三月の四か月間。それが終われば、アトラクションは一旦閉鎖する。

それが、当初からのルールだった。

「ねえ、なんで!?!」

私は、なりふり構わずにガイドロボットのラッキーに縋り付いていた。

「どうしてっ、どうしても終わっちゃうの!?! ルカとせっかくお友達になれたのに! もう会えないなんていやだよ!」

『アワワワワワワ……』

最初から分かっていたことだったのに、私はそれでも声を荒げざるを得なかった。

四か月あった時間は私が現実から目を背けているうちにあつという間に一か月になり、一週間になり、三日になり、二日になり、一日になり……。今日が、パピリオン最後の日となっていた。

もちろんフレンズは——ルカはそんなことを知る様子はない。なんとなくパピリオンが始まったということは知っていたみたいだけど、パピリオンがどんなものだったのか概要は知らないようだったし。その日の前日だって、ルカはいつものように『また明日ね』と笑って縄張りに帰って行った。

だから多分、ルカにとつて私は『突然消えてしまった』存在になっってしまう。お別れを切り出そうにも、ただオモチャを置くだけでどうやってルカに伝えればいいだろう。ブランコをいっぱい置いたってきつとルカは不思議がるだけだ。まさか今日急にお別れだなんて、思うわけがない。きつと突然取り残されたルカは悲しい思いをするはずだ。お別れの挨拶もせずに、ルカとさよならするなんて、悲しい思いを最後に残すなんて、そんなの嫌だ。そんな気持ちで、ラッキーに縋り付いていた。

「ねえ、お願いだよラッキー! もしこのまま一緒にいられないなら……せめて、直接ルカに会ってお別れを言わせてよ! このままなんてやだよ! さよならも言えないなんてやだよ!!」

『ア、アワワ……ゴメンネ、ゴメンネ、ルールダカラ デキナインダ。ゴメンネ』

「なんで……なんで!?! ルールってなんなの!?! そんなに大事なこと

なの!? ひどいよ! ひどいよ!!」

『ゴメンネ、ゴメンネ、ゴメンネ、ゴメンネ……………』

ラッキーは泣きじゃくる私を宥めるように、ずっと『ごめんね』と繰り返していた。

ああ、今にして思うと——私はなんて浅はかだったんだろう。

パピリオンは、出会いの為の前準備。ラッキーにかみついたって、どうにもならないのは分かり切っていたのに、こんな無茶を言っただけなら、しつかりルカとお別れして、再会を約束すればよかったのに。

伝わらないかもしれないって、頑張って伝えるように努力すれば、きっとルカになら伝わった。それなのに私は、最初から諦めて……………そして、もつとも愚かな選択を選んでしまった。

「もう……………いいよ! もういいよ!!」

そう言っただけ、あの日の私は逃げるようにパピリオンを後にした。

最後の日、結局私は……………ルカにお別れを言うことも、一緒に遊ぶこともせずに、ロッジのベッドで一人泣きじゃくっていた。

きつとお別れの辛さはルカも一緒だったのに、それなのに自分が悲しいからってそのことに目を向けず、自分勝手に悲しみに押し潰された。

それきり、私は今に至るまで、一度もルカと会ったことはない。ジャパリパークにも、足を運んだことはない。悲しいことを、思い出してしまうから。

あのパピリオンから、世の中の考え方は色々変わった。

フレンズはヒトと同じような存在だからヒトと同じように扱うべきだとか、元々はけものなんだからヒトの文化に触れさせて本来の行動原理を変えるようなことはしてはいけないとか。少なくとも、危険な存在かもしれないって意見はけっこう減ったみたい。

私にはまだよく分からないけれど——そのあたりに正解がないということとはよくわかる。

そんな様々な議論を巻き起こした『第一段階』が終了してから三年後。

ジャパリパークで、『第二段階』が始まった。

「——ジャパリアカデミーは、皆さんがフレンズの皆さんと仲良くなってもらうための『第二步』です」

体育館のような場所で、他の生徒たちと同様に並んでいた私は、登壇している女性の話を静かに聞いていた。

ボロ・ボロの帽子を被ったスーツの女性は、さらに続ける。

「厳密な話をする、ヒトとフレンズが交流するとき気を付けるべきことは何かーとか、どんないいことがあるのかーとか、どんな悪いことがあるのかーとか、このジャパリアカデミー——『ジャパリパーク・リユニオン』には色々な目的がありますし、此処に入学することができた皆さんは当然そういったことを意識していると思うんですけど……」

スーツの女性は、帽子のからはみ出た癖毛を照れくさそうにいじりながら、

「難しいことは、考えなくてけっこうです。難しいことを考えるのは、ボクやほかの大人たちの仕事です。皆さんは、フレンズさん達とただ楽しく——普通に学校生活を送ってください。そしてできれば、フレンズさん達と仲良くなって、将来、ヒトとフレンズさんの架け橋となってください」

そんな話を、していた。

「フレンズさん達って、皆さんマイペースだし、ヒトとは変わってるので色々勝手が違うかもしれませんが……皆、とってもいい方たちばかりなので」

……………。

「どうかキミ達にも、大切な友達フレンズができますように」

……………。

「では、そんな祈りを以て、理事長の話に代えさせてもらいますね！」
そんな理事長先生の言葉のあと、簡単な今後の予定の説明なんかが入って、ヒト新生生の入学式は終わりとなった。

そして最初のホームルームのために教室に移動するその道すがら、私は理事長先生の言葉を思い返しながら、こう思う。

……私は、多分理事長先生の祈りを受け取ることはできない。

だって私は、色んなフレンズと仲良くなる為にこの学園に——リユニオンに来たわけじゃないもの。

ルカと別れてから三年。

あれからすぐにこの計画のことをお父さんから知った私は、猛勉強に猛勉強を重ねた。動物のことはもちろん、他の色んなことを勉強した。全ては、この日のため。難しい試験を乗り越え、ジャパリパーク・リユニオンに参加する為の資格を手に入れ——フレンズと話ができる場所に立つため。

ルカと、再会するため。

あの日会いに行かなかったことを謝って、また一緒に遊べるようになるため。

私は、ルカと会うためだけに此処に来た。たった一人のフレンズと仲良くなるためだけに。

ルカが此処に来ているとは限らない。でも、それならそれで道ならいっぱいある。ルカっていう名前は知ってるんだし、理事長先生に直談判して聞けばきっと分かる。サーバルキャットのルカ、そして外見の特徴、そして住んでいたエリア。調べるための情報は全部そろっている。あの態度ならきっと私のお願いを無碍にすることだってないはず。きっと……！

そんな風に覚悟を決めながら、私はとりあえず教室に入る。

先ほどの『入学式』はヒト用のもので、フレンズ達は一足先に教室で待機している——というのは、事前に聞いていた話。

そういうわけで、教室に入ると既に半分の席は埋まっていた。既に席に座っているフレンズ達の多くは、学生服を着ている私達とは違い、色とりどりの服を身に纏って各々談笑したり毛繕いしたりしていた。

そしてその中の、一人。

窓際の席で、緊張したみたいに耳をびくびく震わせながら、あたりを見渡しているフレンズを、私は認めた。

外に開いた大きな耳、黄色に茶色のヒョウ柄模様が特徴的な可愛い

服、縞模様の太くて短いしっぽ。ネコ科のフレンズに多く見られる服のデザイン。私にとっては、忘れようのないフレンズだった。

年上のように見えたあの子の姿は、今はもう私と同年代。時の流れを感じるよりも先に、私はそのフレンズの方へと駆けだしていた。

の の の の の

これは、私とルカの、再会のお話。

『さよなら』を言うことができなかつた私達が、『ひさしぶり』を言うまでの物語。

い。そんな状況でルカが初見で私を認識できるわけがない。それは分かってる。だから、ショックだったのはそこじゃない。

私がショックを受けたのは……『自分がブランコだと名乗ってもルカが気付いてくれない可能性がある』ということに気付いたからだ。気づいてくれないのは、少しもおかしなことじゃない。私はルカのことを忘れたことなんて片時もなかったけれど、それは私が離れていった側で、相手に一切悪感情を抱いていないから。ルカからしてみたら、何年も前にちよつとの間遊んだ、顔も分からない不思議なヤツでしかないわけで……覚えていない可能性なんか、十二分にあり得る。

でも、私はそんなちよつと考えれば分かる推測をこの三年間、一度も考えたことがなかった。……ひよつとしたらあの日の思い出を大切に思っているのが自分だけだったかもしれないなんて、考えたこともなかった。

もし……もしも。ルカが私のことを覚えていなかったら、どうしよう？

いや、それで済めばまだいい。昔のことを怒っていて……『アンタがわたしを放つてどこかに行ったブランコ!?』なんて言われたら……どうしよう。

そこまで考えて、私は自分の頭の幸せ加減に眩暈を覚えた。

あり得るところか……それが普通じゃないだろうか。だって、あれだけ毎日一緒に遊んでいたのに、ある日突然いなくなつて、何年もほつたらかして……そんな薄情者がこのこあらわれて、また仲良くしましょうなんて……そんな身勝手な話が許されるだろうか？許されるはずがない。

きつと、怒る。ルカに軽蔑される。嫌われてしまう。……そんなのいやだ。絶対にいやだ。

——でも、だからといってルカを目の前にして、全く関わらないで過ごすなんてことはできない。

この瞬間、私の中で、目標が定まった。

私があのパピリオンでルカと一緒に遊んでいたことは……言えな

い。だから、隠そう。あの日のことは全部隠して……またここで、一から始めよう。

『ブランコ』ではなく、『セツナ』として。

またルカと、最初から友達になるのだ。

「……お、お疲れ、さま」

——というわけで、最初のホームルームを終えた後何故か疲れたように机にへばりついていたルカに、私は意を決して声をかけた。

ルカは気怠そうに首だけこちらの方に向けると、むう、とへの字に口を曲げた。

「もうあきたー」

そして開口一番にこれだった。飽きたって……ホームルームが？

いや、確かに先生の話は退屈だったと思うけど、ものの五分くらいで、大人の話にしてはまだ短いレベル……と思ったけど、周りを見るとフレنزの大半はルカと同じように早くも疲れ果てているようだった。

これは……。

「げ、元氣出して。次は身体測定でしょ？ ルカ……ちゃんも思いつきり動けばスッキリするよ」

つい呼び捨てにしそうになって、私は慌ててちゃんをつけつつルカを励ます。ルカはちよつとだけぽーっと私の顔を見ていたけど、すぐに気を取り直して頷いた。

「……、……そうね。えーっと、そのしんたいそくてーはどこでやるんだっけ」

「裏山……だよ。ひ、ヒトの身体測定は入学前に済ませているから……私達は、フレنزのみんなの見学……かな……」

そう言うと、ルカはへーと感心しているようだった。

そもそもジャパリアアカデミー——リユニオン計画の目的はフレنزとヒトが交流したときの影響を観測するためのもの。だから、まずはフレنزの身体能力をヒトに認識させて、それによってどういう反応をするか見たい……というのが、多分運営側の意図なのだろう。

別にそういう風に説明されていたわけではないけど、このくらいは

計画の意義を理解していれば自ずと分かることだ。

……まあ、運営の意図は分からないとしても、この後どこに行くかってことくらいはルカも聞いてるはずなんだけど……。

なんてことを考えていると、私の視線の色から考えていることを悟ったのか、ルカはちよつとだけむつとした表情で、

「……あによ。あんなごちやごちやした説明されても分かるわけないじゃない。そうだわ、アンタが今度からわたしの代わりに説明聞きなさいよ。そうすればわたしが話を聞いてなくても大丈夫だし！」

「えええ〜……不真面目だなあ……。まあいいけど……」

苦笑しながら承諾して……。そこで、私は気付く。

なんだかもう、すっかりちやんと友達になつてるんじゃないだろうか。周りを見てみても、他のヒトやフレンズと遜色ないレベルで、私はルカと打ち解けられていた。

……中には『お姉さま〜』とか早くも変なことになっているヒトの生徒がいたけど、それはそれとして。

「どうしたの？ さつさと案内しなさい。もう皆行っちゃつてるでしょうが」

「はいはい……」

ルカに急かされ、私は彼女を裏山まで案内する。

未来は明るい。そんな気がした。

の の の の の

裏山までの道はきちんと整備されていて、基本的な学園の構造さえ理解していれば迷うことはないだろう——といった感じだった。

「えーと、まだ数名こちらには辿り着けていないようですが……しようがないですね。もう始めてしましましょう」

監督役の先生が、そんなことを言う。此処にいる面子と先ほど教室で見た面子を照らし合わせると——どうやら、ヒトが一人、フレンズが二人ほどいないらしい。

状況的に見て、いないフレンズのフォローにヒトが入っている、といった感じかもしれない。まあ、私はルカを此処に案内するので手いっぱいだったからそこは関係ないけれど。

「今回は、フレンズの皆さんの身体測定をすると同時に、ヒトの皆さんにはフレンズの皆さんの動きを見てもらいたいと思います！」

「どうでもいいけどこの監督役の先生、どこかあの理事長先生と声が似ているような気がする……本当にどうでもいいか。」

「うー、めんどくさいわね……。しんたいそくてーなんて、何の意味があるのかしら？」

「ダメだよルカ。身体測定は身体の健康を見るために大事なことなんだから。疎かにしていたら病気がすぐに見つからない、なんてこともあるんだよ」

「その通りですセツナさんっ！」
「わっ」

横でぼやいていたルカを窺っていると、監督役の先生がビシ！と私の方へ人差し指を突きつける。思わずびつくりしてしまった私とルカをよそに、監督役の先生は身体測定の意義について語り始めた。
「……アンタ、意外と賢かったのね……」

監督役の先生の話はもちろん聞かず、ルカは私の横顔を見てそんなことを呟いてきた。……まあ、三年間も頑張ったから。とは言わなかったけど、私は内心ちよつと誇らしく思いながら、

「意外とって何き。意外とって」
なんて言つて、笑った。

そうこうしているうちに監督役の先生の説明も終わったらしく、フレンズ達は裏山へと向かうことになった。

ヒトはここで待機——なのだけど、ここで校舎の方から三人分の足音が聞こえてきた。確認するまでもなく、来ていなかった一人のヒトと二人のフレンズだろう。

「すみません……！……この子が迷っちゃって……」

と言いながら頭を下げたのは——焦げ茶のパーカーを着た少し小柄なけもの耳の少女、つまりフレンズだった。ひらべったい尻尾の形状、それから服装などから推測できる体毛の色……おそらく、ビーバーの仲間だと思う。

もう一人頭を下げているのは……白い髪色、黒い縞模様、長い尻尾

のフレンズ。これは特定できる。多分、ホワイトタイガーのフレンズだ。

……ん？ よく見たらさらにその隣で一緒に頭を下げている『この子』と呼ばれた生徒……桃色がかった髪だけど、制服を着ているし、後の二人はフレンズだし、必然的にヒトということになるのでは？

ええー……ヒトって、ヒトがフレンズのお世話になっていたらダメでしょう。別にヒトの方がフレンズより知能が優れているとは思わないけど、散々事前の説明会とかで校舎の構造については説明を受けていたんだから、むしろフレンズを引っ張っていくくらいじゃないと……。

「……ロップさん、ありがとう！ 本当に助かったよ！」

「まったく、ナナはおつちよこちよいだねえ。あとシロにもお礼言いなねえ」

「わたしはただ付き添っただけさ……。気にしないでくれ。じゃあナナ、わたし達も行ってくるよ」

「いつてらっしや〜い」

……まあ、フレンズとは打ち解けているみたいだし、そういう意味では私なんかよりこの計画に相応しいのかもしれないけど。

その後は、身体測定もつつがなく進んだ。フレンズのモニタリングにはパビリオンの技術が使われているらしく、パビリオンゴーグルを装着し、フレンズを追尾するラツキービースト3型から送られてくる映像から身体測定の様子を確認する——というものなんだけれども。

「わあああああ〜ひやあああああ〜!!」

さつき遅れてきた生徒が、フレンズに追従するラツキーの映像に振り回されていた。私もゴーグル越しだから様子は分からないけど、声の位置が若干低いので、多分驚いてひっくり返っているのだろう。

無論私はルカの姿を追うのに忙しいのでそんなリアクションをしている暇はないけど……ああ！ もっと前でしょ！ 何してるの！ そんなんじやすぐにルカが離れて行っちゃうじゃない!!

……ともかく。あの生徒ほどではないにしても、そこかしこから短い悲鳴は聞こえている。それはつまり、『フレンズの世界』に恐れを感じ

じているということでもあるんだと思う。

もつとも、変わらない感性じゃない。

誰だつて、自分の尺度で物を見てしまいがちだ。『こんな素早い速度で動いていたら、転んだりしたとき大怪我しそう』って不安に思ったりする。そして、たとえそうなつても怪我一つしないフレンズの凄さに驚嘆するのだ。

そこで『フレンズが怖い』と思うような人間は、今頃ここにいない。でも、フレンズがヒトとは違う世界に生きていると理解することが、今回の身体測定の意義である以上、ヒトとフレンズの違いを肌で感じることが必要なシークエンス。そういう意味では、今回の試みは大成功といつても良いだろう。

……だからルカはもうちよつと先だからそつちの方に寄つてよ！

そうこうしているうちに、巨大鉄球投げ、一キロ走、岩山登り、滝壺潜りなどなど、様々な種目（もちろんヒト基準ではありえないものばかり）をこなしたフレンズ達は、めいめいに身体測定の感想を言い合いながら戻ってきた。

何人かのフレンズはへとへとになっているようだったが、たいていのフレンズは軽く息を切らしつつも、思う存分動き回ることができてすつきりしているようだった。

……フレンズにとっては、このくらい動いて初めて『楽しい』ということなんだろうか。あの日のパピリオンでも、確かにめいっぱい暴れていたような気がするし。

「ルカちゃんお疲れ様」

「ほんとよ。あー疲れたわ。セツナ達だけ何もしないのって不公平じゃない？ ……って思ったら、なんかセツナ以外みんな疲れてるっほいんだけど……何かやってたの？」

「あはは……ルカちゃんたちの身体測定の様子を見てたんだよ。みんなフレンズの動きに慣れてないから、参っちゃったみたいで」

そう言うところカは納得したように頷いて、それから私の方を見て、こう言つて首を傾げた。

「……じゃあなんでアンタは参っちゃってないの？」

.....。

た。 散々一緒に遊んだからね、とは当然言えず、私は笑って言葉を濁した。

その3：あいべや

身体測定が終わり、すぐに下校ということになった。

下校——といっても、ジャパリアカデミーはごく一部の例外的なフレンズを除いて学生寮で生活する。

寮はヒト寮とフレンズ寮で別れていて、二つの寮は歩いて五分ほどの距離。ヒト寮は何人かの相部屋だけどフレンズ寮は個室なので、その兼ね合いで寮を分けているとのことだ。

ちなみにフレンズ寮が個室なのには理由があって、フレンズの多くは元々野外で生活していたから、各々のけものだった頃の生態や縄張りの観念から、あまり住居の中に他者を入れるのはストレスになってしまう、ということなんだとか。このあたりは『リユニオン計画』の主目的から言ってもヒトとフレンズの住空間はなるべく近くに置きたかったはずなんだろうけど、フレンズのことを優先したということなんだと思う。私も、その判断には賛成だ。

「別に、歩いて五分なら私が遊びに行けばいいだけだしね」

そんなことを呟きながら、私は自室の机に学生鞆を置いた。

私——とルームメイトに割り当てられた部屋は、1LDKの二人用の部屋。ダイニングキッチン、洋室、トイレ、お風呂という構成だけど、二人でも狭苦しくなくらいには広々としたつくりになっている。

扉を開けるとすぐに洋室の中が見えてしまうのが玉に瑕だけど、この洋室にしたって私とルームメイトのベッドとデスクがそれぞれ一つずつあっても狭くないんだから、学生用の物件としてはそこそ良い部類じゃないかなと思う。政府主導のプロジェクトだから当然家賃は全額免除だし。

本当に、ジャパリパークは昔と変わらず、過ごしやすい場所だと思う。今日だって入学式ということでもクラスの顔合わせと身体測定以外にやるべきことはなかったから、早めに帰ることができたし。

……フレンズはそれでよくてもヒトの方は身体測定を経て感じたこととかレポートにまとめておくべきなんじゃ？ と少し思ったけ

ど、ルカと遊ぶための時間を多くとれるのは私にとっても都合がいいのでそこについては棚上げしておく。そういうことはあとで自主的にやればいいや。

「んー……着替えようかな……」

制服のリボンを緩めて一息ついたところで、私はふとそう思い立った。

ジャパリアカデミーは説明した通り全寮制だけど、別に生徒は常に制服着用が義務付けられていたりするわけじゃない。そもそもフレンドズが十人十色の衣装（というか『毛皮』）を身に纏っているわけだし、当然と言えば当然だけでも。

一応学校指定の制服も存在はしているものの、本当にこれは『一応』でしかない。入学式や式典などの『フォーマルな場』で着用する為——つまり正装として準備されているだけで、毎日着てくることなどはなから想定していないのだ。

とはいえ、私は私服とか面倒くさいので学校生活では制服で過ごさうと思っていた。

問題はそこで、学校生活では基本的に制服で過ごすとして、放課後も制服で過ごすのはいかなものなんだろうか？ と今日の身体測定を見て思ったのだ。

フレンズと遊ぶというのは、おそらくヒトである私にとってはかなりの運動になる。そんなとき、制服では最大のコンディションを發揮できないかもしれない。そして最大のコンディションを發揮できなかったばかりにルカの遊びについていけなくて、それが原因でだんだんとルカとの距離が……なんて考えただけでも発狂しそうになる。

………あ、なんか本当に気分が落ち込んできた。

ともかく！ 私も一応運動は得意な方（というか得意になるよう努力した）ではあるけども、それでも最善を尽くさなくては……という危機感を、今日の身体測定で得たのだ。

であれば、私服が面倒くさいとか言ってる場合ではない。一応念のため私服は用意してあるので、今日のところはそれに着替えていこうと思う。

「……あえ!? セツナちゃん!」

と、そのタイミングで部屋の扉が開いて何やら驚きの声飛び込んできた。……ああそうか、相部屋だった。さっき自分で考えてたのもう忘れてた。こんなところで着替えてたら流石にびっくりするよね、いくら同性とはいえ……。

「ええと……身体測定に遅れてきた子だね、よろしく」

「ナナだよ！ よろしく！ そういう覚え方やめてよく……まだ引きずってるのに。なんで最初の授業であんなポカしちゃうかなあ……」

「まあそんなに気にすることないんじゃないの。最初だししようがないよ」

何やら落ち込んでいるらしき遅刻少女はさておき、私は手早く私服として持ち込んだジャージに身を包む。遅刻少女はわりとメンタルが強いタイプらしく、引きずっていると言いつつすぐに私の恰好に目を向け、好奇心に満ちた表情で首を傾げた。

「ところで、どうしてジャージなんか着てるの？ 何かスポーツでもやってるの？ 自主練？」

「遊びに行くの。……と、友達のところ」

……友達。そう、友達。ルカを捨てた『ブランコ』ならともかく、今の私は……『セツナ』はルカの友達を名乗ってもいいポジションにいる……はず。きっと。今日だってルカの部屋に行く約束だってちゃんと取りつけたし、外部から見れば友達という表現に違和感はない……と思う。

「セツナちゃん？ どうかしたの？ なんかすごい真面目くさった顔してるけど」

「真面目くさったって……きよんとした顔してワードのチョイスがなんかアレだね……」

天然なのは分かってたけども。

「でも、友達のところに行くのにジャージなの？ 運動でもするの？」
「するかどうかは決めてないけど、もしするってなったときに運動できる恰好じゃないと困るかなって」

けることができた。

ここは個体名が記録されているわけではないらしく、その中に『サーバル』の文字を認めることができた。ここが、ルカの部屋らしい。ルカの部屋は—— 一〇一九号室か。

「……………ルカの部屋、かあ」

思わず、眩きが口から漏れてしまう。

友達の部屋に遊びに……………なんて初めての経験だけど、それは多分ルカも同じことなわけで。というかフレンズに家という概念があるのか……。縄張り？ とすると私はルカの縄張りに行くわけで、そう考えると何か作法みたいなことも考えた方がいいのかな？ どう振る舞うのが正解なんだろうか……………。

そんなことを考えているうちに、気づけばルカの部屋の目の前で、私は来てしまっていた。

「……………」

……………な、何を躊躇う必要があるだろう。友達の家遊びに行く、そんなの何もおかしなことじゃない。むしろ躊躇う方がおかし。道の真ん中で突っ立っていたらおかしいように、ここは余計なことを考えず前に進む方が正解。むしろ止まっていたら止まっているだけ、不自然さは積み重なるばかりなんだから。

そう、まずは扉をノック。そこから始めよう、いきなり扉を開けるのは論外としても、ノックくらいなら特におかしいことじゃな、

ガチャリ。

「あれ？ なんだセツナ、もう来てたんだ。遅いから迎えに行こうかと思つてたわ」

「……………びゃあああああああああああああああああ
あつっつ!!!」

自分でもびつくりするくらい大きな声が出た。

の の の の の

「何よ人の顔見るなり大声で叫んで！ びつくりしたじゃない！ つていうか近所迷惑よ！」

「び、びめん……………」

部屋に引きずり込まれた私は、早速ルカのお叱りを受けていた。

ルカの部屋は最初に案内された洋間だけで既に私の部屋の数倍くらいの面積があり、そこにふかふかした干し草のようなカーペットがただ敷かれていた。見た感じ、キッチンはじめ水場の類はない。多分、ごはんについては飼育員さんが準備してくださるんだろう。

「まったくもう。わたしは耳がいいからすごいびっくりしたのよ？」

「まあいいけど………何部屋中じろじろ見てるの?」

「あつ、ごめん」

そこで自分が色々は無遠慮だったことに気付いて、咄嗟に視線を落とした。

「なんだか、私の部屋と違うなって思って……やっぱりルカちゃんは広い方が好きなんだね」

「まあ、そうね。わたしは元々さばんなちほーに住んでたから。これでも狭いくらいなのよ?」

「そ、そうなんだ……」

………なんというか、私達ヒトの都合でルカに無理を強いてるようで、悪い気がしてきた……。せめて目いっぱい外で一緒に遊べば、狭さのストレスとかも軽減してくれるかな。

「好きで来たから別にいいんだけどね。それより今日は遅かったけどどうしたの? もしかして道に迷った?」

「あはは……まあそんなところかな」

まさか玄関先で立ち止まってしまったなんて言えないので、私はあいまいに笑うにとどめた。

ルカはそんな私には特に気にした様子もなく、

「そうそう、セツナが来たら色々案内したいと思ってたの。『りょー』は狭いけど、色々好きに物を置けるのがいいわね」

そう言われて、思わずどきつきってしまった。

好きに物を置ける——というのは、まさしくあのパピリオンの特徴と合致するからだ。もしルカがそれを覚えているなら、『いいわね』という好意的なリアクションから何か……。

「ほら、こっちこっち。池とかも作ってもらったのよ!」

「わ、ほんとにすごい！」

と、そんな私の打算は目の前の光景に一気に吹き飛ばされてしまった。

水場の類はない——と思っていたけれど、部屋を奥に進むと池のよ
うな円形のプールが設置されていた。おそらく身体を洗ったり、水を
飲むための場所なんだろう。てつきりフレンズ用に共用の水場でも
用意されているんだろうと思っていただけ、思ったよりVIP待遇
だったらしい。

「本当にすごすぎいのよ。身体を洗うのも、シャンプーっていうので
楽ちんだし」

「シャンプー……」

使うんだ、シャンプー……。

あ、脇に置いてあるこれのことか。……ちゃんとトウモロコシ原料
の油を使ってる。舐めてもいいようにしてるんだね、ぬかりない。

「言われてみればこのシャンプー、ルカちゃんの匂いがするかも……」
「ちよつと！ 匂いかがないですよ！」

ふと鼻を動かしてシャンプーの匂いを嗅いでみると、ルカは恥ずか
しそうに自分の身を庇った。そこがなんだかとても可愛らしくて、私
は思わず笑みをこぼしてしまった。可愛いやつめ……でもあんまり
やりすぎると拗ねるので、私はそこそこにシャンプーをもとあつた場
所に戻す。

「まったく……アンタ意外とアレよね。なんかミライみたいだわ
……」

「……？ ミライ？」

知らない名前が出てきたので、私は思わず首を傾げた。

そんな私にルカは意外そうな表情をして、

「え？ 今日いたでしょ、身体測定のとき。あいつのことよ。パーク
のなんとかたいちょう？ とかなんとかで、前から知り合いなの」

「へえ、そうなんだ……」

ああ、探索隊の隊長だっけ。ミライジャパーク探索隊隊長、
だったかな。……え？ あの人か？ しまった、ホームルームのとき

とか完全にルカに気を取られてたから、あの人の自己紹介全く聞いてなかった……!

くう、ミライさん、尊敬していたのに……無意識に失礼なことかしてないかちよつと不安だな……まあ今はルカと遊んでるからそれはわりとどうでもいいけど。

「昔から知り合いなのか……」

「どうかした?」

「いや、なんでもないよ」

昔から知り合い……というカテゴリから、『ブランコ』の話が来るかもしれない……なんて恐怖とも期待ともつかない気持ち脳裏に去来したけれど、それはどうやら杞憂だったらしい。特にそこから話を膨らませる様子のないルカに、ほつとするやら、がっかりするやら。……あれ、私はいったい何を求めてるんだろう……。

「そうだ。こつちに一番見せたいものがあるのよ。ねえセツナ、こつち来て!」

そこで、ぱつと表情を明るくさせたルカが私の手を引っ張った。思わずつんのめりそうになりながらも慌ててルカについて行くと、池や干し草とは違うもう一つの部屋が私の目に飛び込んできた。

どうやらここがルカの自室の最後の一つらしく、他に部屋がある様子はなかった。さて、そんなルカの最後の部屋に何があったかという
と――、

「こ、こは……」

そこは、『遊び場』だった。

タイヤやら鉄棒やら、遊具が無造作に設置されている。天井はほかの部屋と違って水色で塗られ、そこだけサバンの休憩所のような雰囲気になっていた。

「いやあ、パークの連中もいい仕事するわよね、要望通りだったわ」
ルカは満足そうに私にその遊び場を自慢していたけど、私は何か言葉を発する余裕さえなくなっていた。

私の視線は、ある一点に釘づけになっていた。

「あれ……」

「ああ、あれ？ ブランコって言うのよ。知ってる？」

「……………うん、うん」

知ってるよ。

知ってるに決まってるじゃん。私は、アナタとずっと一緒に、アレで遊んでたんだから。

「わたしのお気に入りのよね、アレ。どう？」

「……………どう、って？」

「んー。……………楽しそうでしょ！」

「……………、」

その瞬間、私はあともう少しで『楽しいに決まってるじゃん！ 昔も一緒にアレで遊んでたんだから！』と言うところだった。

危なかった。気を強く持ってなかったら、私は低きに流されてとんでもない過ちを犯すところだった。私は『セツナ』であって、『ブランコ』じゃない。そこは、絶対に破ってはいけない一線なんだから。

「……………じゃあ、一緒に遊ぶ？ あのブランコで！」

気を取り直して、私は精一杯の笑顔でルカに提案した。

その提案にルカが頷いたところまでは、覚えてる。

——その後のことは、部屋に戻ってから思い出そうとしても、全く思い出せなかった。

ただ翌朝、何故かナナにすごく心配された。

その4：ぬきうち

『リユニオン計画』という大義名分はあるものの、基本的に『ジャパリアカデミー』は日本国の認可を得た真つ当な学校法人であり、当然ながら私をはじめとしたヒトの生徒は普通の高等学習を受けなくてははいけない。

フレンズの生徒も参加できる教科には参加するけれど、当然フレンズが高校の教材を使えるはずもないので、座学の時間は基本的にヒトの生徒だけで行われる。

まあ、ルカの為にジャパリアパーク・リユニオンにやってきた私にとっては、そんな時間は退屈極まりないわけで……。

「x||3、y||3/4になります」

指名された問題の解説を求められたので答えて、私は席に座る。

ジャパリアカデミーはそのカリキュラムの大半をフレンズとの交流に費やす為、基本的に勉強はハイレベル極まりない。入学時点で高校二年生の四月時点の学力は最低でも求められるし、入学後もそこからかなりのハイペースで学習は進んでいく。

苦ではないけれど、やっぱり自学の必要性は感じるな……と身が引き締まる気持ちのする緊張感がある授業だ。

「……セツナちゃんすごいねえ……」

隣の席に座るナナが、小声で私に声をかける。

ナナは本当にどうしてジャパリアカデミーに合格できたのか謎なくらいのバカで、昨日予習をしている私のノートを横目に見た程度で知恵熱を起こすレベルだった。

見るに見かねて勉強を見てあげたら今日はなんとかついていけるようなので、地頭はいいんだろうけど……。

「ナナも頑張りなよ。このままだと中間テスト赤点だよ」

そんな呆れも半分で、私はナナに小声で言う。

確か、カリキュラムによると四月下旬には初めての定期テストがあったはず。試験は年四回、前期中間・期末、後期中間・期末。それぞれのテストで、赤点をとったらその分の点数を埋めるための『特別

ね罰ゲームなんて」

「……………ルカが罰ゲームする姿はちよつと見たいかも…………いやいや、ダメだぞ私。」

「でもルカちゃん、安心して。明日は抜き打ちテストはないから」「え!?!」

私がそういうと、ルカは分かりやすく目を輝かせた。ツンとしてるくせにそういうところですね。人に言うことを信じちゃうところが可愛いなあ…………。

そんな視線を一身に受けた私はちよつと自慢げにしながら、

「抜き打ちテストのパラドックスって言ってね。知ってるかな」「知らない」

ルカはきよとんとした顔で首を横に振った。だろうね。

「ごほん。じゃあ、ちよつと想像してみてください。金曜日に、先生が『来週抜き打ちテストをやります。抜き打ちテストなのでいつやるかは分かりませんよ』って言いました」

「うんうん」

監督役の先生の口調を真似たからか、ルカはちよつと面白そうに笑いながらも頷いてくれた。

このたとえ話は分かるみたいでよかった。まあ、まさに抜き打ちテストの話だから想像しやすいらさうか。最初に、抜き打ちテストが『来

週の金曜日』に行われると仮定する」

「うん……………うん? うん」

なんとか理解できたみたいだね。

「でも、この理論では抜き打ちテストは金曜日にはやらないことが分かる。なんでだと思おう?」

「……………なんとなく?」

「残念」

私は指で×を作りながら、

「金曜日に抜き打ちテストをやるとすると、月曜日から木曜日までは抜き打ちテストはやらないよね?」

「そうなるわね」

「じゃあ、木曜日が終わった時点で抜き打ちテストをやる日は金曜日しか残らないから、『いつやるか分からない』わけじゃないよね。いつやるか分かるなら抜き打ちテストじゃなくなるから、金曜日に抜き打ちテストはされない」

「確かに……」

私の説明に、ルカはみみと神妙な顔で頷いた。

「木曜日の場合も同じで、水曜日が終わった時点で抜き打ちテストをやる日は金曜と木曜の二択。さつき説明した通り金曜日に抜き打ちテストをやることはないから、木曜日にやるしかないよね」

「でも、木曜日にやるって分かっちゃったら抜き打ちにならないじゃない」

「そう、だから木曜日もやらない」

「な、なるほど……!」

私の説明に、ルカはみんみと驚愕を隠せない声色で頷いた。

「って、いうことは……」

「そう。水曜日も火曜日も月曜日も、同じ理屈で『いつやるか分からないテスト』である抜き打ちテストはやることができない。つまり、この問題では『抜き打ちテストは来週には行われぬ』ってことになるんだよ」

「す、すごいわセツナ! アンタ天才なんじゃないの!?!」

「ふふん」

私は胸を張りながら、

「つまり、明日のいずれかの時間に抜き打ちテストをやる……という今回の場合でも同じロジックが使えるんだよ。六限にやるとしたら抜き打ちテストが成立しなくなるから六限はなし、五限も……って感じ」

「ろくげん? ごげん? ごじかんめとろくじかんめじゃなくて?」

「あつ、そうだね」

フレンズ側だと時限はそう呼ぶんだ。確かに私も小中の頃はそうだったしな……。

ちなみに、ルカの勉強を見ると申し出た背景には、フレンズ側で具体的にとのくらしいの難度の勉強をしているのかを確かめるという意味合いがあったんだけれど――。

「やっぱり小学校レベルだね……」

見た感じ、小学校一年生レベルといった感じだった。ひらがなカタカナの書き取りに、一桁の加算減算くらい。ひよつとすると小学生レベルにすら行っていないかもしれない。

まあ、フレンズはその殆どが未就学児童みたいなものなので、一から勉強を教えるならやっぱり小学校レベルなのかもしれないけれど。

お蔭で私は、何かと四苦八苦しながら小学校一年生の問題をルカと一緒に解くことになった。大変だった。

「セツナ、けつこう教え方うまいじゃない」

「そう？」

自分ではもうちょっと上手いやり方があるんじゃないかなって思うんだけど。

自覚があまりできなかったので首を傾げたけれど、ルカはうんうんと私に頷き返して、

「そうよ。べんきょーとか全然分からなかったけど、セツナが教えてくれたらすごくよく分かったもの。アンタ多分、ミライより先生に向いてるわよ」

「あはは……」

そもそも監督役の先生はもともと調査隊の隊長さんで、教師というよりガチガチの現場指揮官タイプだから……。

「あーあ、セツナが先生になってくれたら、じゅぎょうも楽しいのになー」

「私の方もテストがあるからね……」

私のことをべた褒めなルカが照れくさくも誇らしくて誇らしくて『すぐそうするよ先生に話つけてくるね』と言いたいのを抑えて、思わず頬を掻きながらそう言ったのがまずかった。

ルカは私の言葉に目を丸くして、

「え!? じゃあセツナもべんきょーしないとダメじゃない! 何わた

しのべんきよーなんか見ちゃってるのよ！」

「いや、私の分は帰ってから部屋でやるつもりで……」

「いいから！ さっきの分、わたしがルカの先生やっただげるから！」

そう言っつて、ルカは先ほどの私を真似るようにノートを広げて、ペンを持つ。

あー……今のルカに理解できるような難易度では………あー………。

結局、その日私はルカの寝床の支度をしてから自分の部屋に戻ることにした。

ルカの寝顔が可愛かったので、翌日の抜き打ちテストは完璧だった。

その5：なかだち

「全然ダメだったー」

抜き打ちテストからいくらか経った日の放課後、自室にて。

私の隣でそんな声を上げたのは、ルームメイトのナナ。ナナはこの間の抜き打ちテストで壊滅的な点数を取ってしまい、あの温厚なミライさんから『これはまずいですね……』と言われてしまい、『抜き打ちテストの追試』をやっていたのだった。抜き打ちテストの追試って、もう抜き打ちテストのパラドックスどころじゃないと思うんだけど……。

本当に、やればすぐできるようになるのにどうしてできないんだろう。ナナに聞いたら『本番は緊張しちゃって……』とかなんとかだつたけど、よくそんなのでジャパリアアカデミーの面接試験通ったと思う。う。

「ナナは緊張しすぎなんだよ。教えたらすぐ分かるくらい地頭はいいんだから、落ち着いて問題に取り組めばこんなテストくらいなんてことないのに」

「そんなこと言っても！ 赤点とつたらダメだと思おうと緊張するじゃん！ ていうか全然緊張しないセツナちゃんがすごいんだよ！」

「いやまあ普段通りやればいだけだからね……」

私が特別というわけではなくて、他の皆も大体そうだから、むしろ特別なのは抜き打ちテストごときで緊張するナナの方だと思うんだけど……。

とはいえ、抜き打ちテストごときでここまで憔悴しちゃうとなると、定期テストのときはヤバそうだなあ……とそこまで考えて、私は重大なことに気付いた。

そうだ、定期テストのとき……ヤバいじゃん！

私は定期テストに不安要素なんてないけど、目の前にいるこのポンコツピンク頭は違う。とすると、定期テストの時期には自室に戻るたびにナナの阿鼻叫喚具合を眺めるハメになるわけで……。……。……。うん、今のうちにどうにかしないと、テスト期間中は限界までルカの

部屋に避難しなくちゃいけない。あれ？ それって実はかなりアリなのでは??? むしろ積極的に言い訳に使って、あわよくばテスト期間中相部屋を運営に認めさせるというのも……いやいや、あんまり四六時中一緒にいすぎるとちよつとアレだから……抑えきれなくなる。……ほどほどに、調整しないと。」

「そんなに緊張するなら、こうしようよ」

そんな打算を以て、私はナナに提案する。

「テストのとき緊張しなくて済む方法を……フレndsに聞いてみよう！」

の の の の の の

その5：なかだち

の の の の の の

「おー！ いいねいいね！」

私の提案に、ナナは開口一番に同意した。

……いや、自分で言っておいてなんだけど、そこですぐに『いいねいいね！』になるんだ……。『誰に聞くの?』とか『そもそもフレndsにテストで緊張しなくなる方法を聞いてどうするの?』とかみたいなき間が出てきて当然じゃないかな？

まあ、一応そこについては考えてるんだけど……。

「フレnds達の特徴については全部調べてあるからね。緊張を和らげてくれそうなフレndsも、大体分かってる。その子の力を借りに行こうか」

「え。……セツナちゃん、言っちゃなんだけど教室でも放課後でもサーバルのフレndsとずっと一緒にいるのに、いつの間にそんな詳しい情報まで……」

「あくまで片手間程度にだから大したものじゃないけどね」

一応計画に参加してる身なんだから、同じ参加フレndsのことくらいは一通り調べるよ。

パピリオンにどハマリしていた頃、お母さんが言ったからね、『やりたいことだけをやると、結局やりたいことはできなくなる。やるべきことをきちんとやって初めて、やりたいだけやりたいことができる

のよ』って。

だから私は、ルカと遊びたいだけ遊ぶために計画参加者としてやるべきことはしつかりやるようにしているのだ。

「私、まだ顔と名前が一致してないフレンズもいるのに……セツナちゃんすごいなあ」

「そうかな？ まあナナもすぐ覚えられるだろうし」

そもそも、顔と名前、パーソナリティの一致なんて遅かれ早かれ誰でもできることだ。ちよつとくらい早いからといって、意味のあることじゃない。というかナナは人懐っこい（というかフレンズ懐っこい？）から本当にすぐみんなの顔と名前くらい一致させそうだし。

ともかく、重要なのは一致させた情報をどうやって活用するか。即ち、今回のようにいかに適した状況で適した特技を持つフレンズとコミュニケーションをとれるか、ということだから。

「いやあ、本当に助かるわ！ 頼りになるね！」

「ちなみに、情報を知ってるだけで話しかけたこととかはないので他のフレンズに仲介をお願いする必要はあるんだけどね」

「えっ！」

私が付け加えると、ナナは驚いたように固まった。何をそんなに驚いているのやら。私はあくまで『顔と名前と特徴を一致させた』だけでしかないというのに。

私が学校でも放課後でもルカとしか一緒にいないのはナナも知ってるでしょう。そんな私が、他のフレンズに助けを求めに行けるわけなんてないじゃない。初対面なんだから。

「……セツナちゃん、おかしなところで遠慮するよね……」

「いやいや、普通でしょ？」

の の の の の の

で、フレンズに仲介を頼むと言えば……当然ながらその相手はルカしかないわけ。私はナナを伴って、ルカの部屋まで遊びに来た。

まあ？ 私がルカの部屋に行ってることはナナ含めて多くの生徒に知れ渡っているみたいだし、もうそこまで行ったらルカの中でも『セツナ』はけっこうほかの生徒とは隔絶した友達って感じだろうし？ ここまでくれば別に今更ナナがルカと友達になっても問題ないかな、みたいな思惑もあつたりする。

「……セツナちゃん、何してるの？」

「ん、別に……扉をノックする前の準備体操」

ノックする心の準備を済ませた私は、怪訝そうな表情をするナナに答えてから、扉をノックす、

「はいはい。セツナ、今日はほかの人も連れてきたの？」

「うびやあああああああつ!!」

「わっ！ びっくりしたわね……いきなり叫ばないでよ」

はー、はー……。ちよ、ちよつと準備体操を念入りにしちゃったかな……。

準備体操を念入りにすると、どうやらルカには私の足音が聞こえているらしく、向こうの方から出迎えてくれる。歓迎されているようであれしいといえばうれしいんだけど、私としては完全に意識の外からルカの顔を見てしまうからすぐびっくりしてしまう。

……あ、本当に準備体操を念入りにしているだけだから。動き出す決心がつかないとかではないから。

ともかく！

「こんなところで立ち話すのもなんだし、二人とも上がりなさいよ」

言いながら、ルカは私とナナを案内してくれた。

そして部屋に入りつつ、ルカは私に話を振ってくる。

「それで、今日はどうしたのよ？ 珍しいじゃない、ヒトの知り合いを連れてくるなんて。ルームメイト……だっけ？ その子？」

「あ、知ってくれたのね！ 私はナナ。よろしくね」

「うん、よろしく。わたしはサーバルキャットのルカよ」

あれ……ルカにはナナのことはまだ話題にも出していないなかったよな。学校でもそこまでおおっぴらには言っていないかったし、そんな情報を知ってくれているなんて、ルカはけっこう私のことを見てくれ

てるんだな……えへへ……。

「えつとね、えへへ。実はこの子、この前の抜き打ちテストだめだめさ……。テストで緊張しちゃうらしくって、緊張しない為のコツをフレンズに教えてもらおうと思って」

「えー？ わたしそういうの全然だめよ？ とうかわたしも、前回の抜き打ちテストだめだめだし……」

「ああうん、ルカちゃんにテストのことは期待してない」

そこははつきりと断っておきつつ、

「ジャイアントペンギンのアンちゃんって子、いるでしょ？ その子の特技が確か『人前で歌うこと』だったと思うんだけど、それなら緊張しない為のコツとか知ってるんじゃないかなと思って。でも私、その子と知り合いじゃないから……紹介してくれないかなって」

「ええー……」

……あれ、意外と渋られてる。とうかルカ、さつきよりも若干不機嫌になっているような。どうしたんだろう。私、何かしちやつたかな……？ いや、もしかしてナナを此処に連れてきたこと自体ダメだった？

考えてみれば縄張りに知らない人を連れてきてるみたいなものだし、そう考えると私はルカの信頼を裏切ったことになってしまいうんじゃ……!?!

「まあいいけど」

ど、どうしよう。謝らないと。このままだとルカに嫌われてしまう

……！

「……セツナ？ どしたの顔を青くして。なんか忘れ物でも思い出した？」

「ヒエツ」

と思考を巡らせていると、きよとんとした顔でルカが私の顔を覗き込んでいることに気付いて、思わず身をのけぞらせてしまった。ち、近い……！ ルカの顔が、めっちゃ近いよ……！

……ともあれ、この様子だとそんなに怒っていたわけじゃないみたい。どうやらさつきのは私の早合点だったみたいだ。よかった

……。

「アンでしょ？ アイツならりよーでたまに話すし、別に紹介くらいしてあげるわよ。ただアイツ、ベンキようとかそこまでできなかつたと思うけど」

「いいのいいの！」

ルカの懸念に、ナナは笑いながら返した。

「セツナちゃん曰く、私勉強はやればできるらしいから。とにかくテストで緊張しない方法を身に着けることができれば、居間よりずっとよくなるんだって」

「へえー……。セツナは色々考えてるのねえ」

「そうだよ！ セツナちゃんすごいんだー」

「うん、知ってる」

知ってる……。知ってるかあ。なんかこうして第三者を交えることでルカの私への評価が聞けると……。すぐく照れる。うふふ。

「じゃあ、案内してあげるから二人ともついてきなさい」

「はーい」

などと考えていると、話がまとまってるかが再度動き始めた。私は置いて行かれないようにナナと一緒に戻って返事をしながら、それに付き従って歩き始めた。

……。どうしてもやっついてしまうのをこらえるのが、とても大変だった。うふふ。

の の の の の の

というわけで、ジャイアントペンギンのアンの部屋まで私達はやってきていた。

水生生物のフレンズが住む部屋の近くということで、この周辺の部屋の床はプールのようになっている。どうやら同じような環境に住むフレンズの部屋はなるべく一か所にまとめておくのが方針ということらしい。

「おーいー。アンーー……。いるんでしょー？ 会いたいってヒトを連れてきたわよー！」

私達を連れてきたルカは、そう言いながらドンドンと扉を叩く。そ

んな乱暴な……。ルカと違ってペンギンはそこまで聴力もよくないだろうし、フレンズ基準ではこれが普通なのかもしれないけど。

「なんだあー？ 三人揃ってわたしの部屋の前に居座って」

「ひゃっ!？」

ひよこっ、と。

まさしく突然、後ろから声をかけられた私は、思わず飛び上がりかけながら声の下方向を振り返ってみる。

そこにいたのは、長い灰髪をした、小学生くらいのフレンズだった。パーカーに水着についているようなパニエのミニスカート、ヘッドホン——そのどれもが、ペンギンのフレンズ特有の特徴だ。

どこか虚ろな気もする儂げな眼差しからして、まず間違いないくジャイアントペンギン——お目当てのフレンズ、アンその人だった。

「はじめまして！ 私はナナ。よろしくね」

「はじめまして、私はセツナだよ」

「おーおー。ごていねいにどーも。わたしはジャイアントペンギンのアン。ま、気楽によろしくな」

アンはけらけらと笑いながら、
「んで、わたしに用って？」

「うん。実はね、私テストとかですっごく緊張しちゃって、それでどうしたもんかなくって思ってたんだけど、アンちゃんって人前で歌うのが得意らしいから、緊張しない秘訣とかあるのかなって」

話を振られたナナが、アンに事の次第を説明し始める。……うん、ここまで話ができれば、もう仲立ちは完了かな。

そう思っただけでルカに目くばせをすると、ルカもにっこり笑いながらこくりと頷いた。じゃ、退散しましょうか。

「……ん？ てことは、そっちのセツナは別に緊張とかはいってことか？」

「そうだよ？ セツナちゃんはテストも完璧なんだ」

「いや、そっちじゃなくて別の……」

「そっちはいいの」

言いかけたアンの言葉を遮るように、ルカはそう言って私の手を

とった。

ほ、ほああああ……!! ルカと手つなぎ……!!!!

「じゃ、わたし達は部屋に戻ってるから。ナナ、ちゃんとアンから緊張しない極意を学ぶのよ」

「がんばってね」

私はなんだか幸せのあまりふにやふにやした気分になりながら、二人に手を振りつつルカに手を引かれて部屋に戻っていった。

その途中、

「あつちは気長にやるみたいだね。ま、こっちはパパつとやつちやうかー」

なんて声が聞こえてきたけど……。何のことだろう。さっぱり分からないや。まあ、ルカの手の感触があったかいから別にいつか……。

その6：たくらみ

「ぐわあああああああゝゝゝゝゝつっ!!!」

今日も、自室に馬鹿の悲鳴が響き渡った。

「うるさいなあ……ナナ、叫んでも学力は変わらないよ」

「これが叫ばずにいられるかあ！ 定期テスト初日は壊滅だよお……」

「それ、テスト前も言ってたよね」

抜き打ちテストから時は経ち、四月下旬。私達は五日間に渡る定期テストの初日を終わっていた。

といつても、やってることは入学してから一か月間の復習。大したものでもなく、私はいつもやってることをいつも通りにこなしただけだった。

ところがナナの方はそういうわけにもいかないらしく……。

「ちゃんと勉強してればよかったのに」

「やってたよ！ ただちよーつとアンと話が弾んじやったりしただけで！ あとシロとかロップとかと遊んだり……でも勉強もしてたのよ!?! でも授業のスピードが速すぎるんだよ！ 一単元一時間ってあたまおかしいでしょ!?! むしろ一日中ルカちゃんと遊んでたのにテスト完璧なセツナがすごすぎる!」

「そりゃ、一緒に遊んでるって言っても夕食前までだし……」

本当なら夕食後も消灯まで遊んでたいんだけど、校則がそれを許さないのだ。本当、ルカとの時間を邪魔するなんて、何の校則だと思っただけ……実際にそういう校則がなかったら私はずっとフレンズ寮に入り浸ってしまう気がするので、これはしょうがない。

そのおかげで一応成績もキープできているわけだしね。

「アンも勉強大変って言ってたしきく。この学校、ちよつと勉強きつすぎない？ フレンズのみんなと色々やるのはすつつつごい楽しいから頑張れるけど」

「ほんとにね」

別に勉強がきついとは思わないけど、でも無味乾燥な勉強も、フレ

ンズ——とりわけルカとの交流のお蔭で頑張れるというのは確かにあると思う。

私はルカとしかあまり遊ばないからそういう意味では落第だけど、ナナの場合は逆にフレンズとのかかわり合いはすごく多いし、友達も多いみたいだから、多分リユニオン計画の成績だと私とどっこいどっこいか、あるいは私より上くらいじゃないかな、と思ってる。

そこまで分かってるなら、リユニオン計画の被験者としてはもっと色んなフレンズと交流するべきだと頭では分かっているんだけど……そういう意識を持っている輩がフレンズと関わり合いになるのって、よくないだろうし。

だから私は、自分が本気でずっと一緒にいたいフレンズとしか遊ばないようにしているのだ。……まあ、人見知りがあるというのももちろん否定はできないけど。

「でも、このくらいで大変とか言ったらナナこの先大変だよ？」

「分かってるよ……。私、そもそも勉強はあんまり得意じゃないんだよね。入学試験だつて、テスト全然ダメダメだったし……。カコお姉ちゃんに色々教えてもらってなかったらほんとに落ちてたと思う……。あと面接？」

「えっ」

その言葉に、私は思わず息を詰まらせた。

カコ……まさかとは思うけど、この子の言ってるカコって、あのジャパリパーク研究所の副所長であるカコ博士のことじゃないよね？ ……いや、あり得なくもない。

正直ナナの学力というか『勉強慣れ』みたいなものは、とてもじゃないけどこの学園の水準に見合っているとは思えない。でも、あのカコ博士にじきじきに色々知識を詰め込まれていたなら、受験だけの短期特化型つめこみ勉強くらいならなんとかなるだろう。ナナは要領良いし。

それになんというか、動物好きな感じとかも、説明会やニュースで何度となく見たカコ博士にどことなく似ている感じはするのだ。そう考えると、なんと数奇な……と運命の巡り合わせに感心してしま

う。

いや、ここまで全部私の憶測なんだけども。

「? どうしたの、セツナ」

「いや、なんでもない……」

ただなんとなく、いちいち確認するのも無粋かと思って、私はそれ以上ナナに質問したりせず、いつものようにルカの部屋に遊びに行く準備を始めた。

の の の の の の

その6：たくらみ

の の の の の の

「ま、まずいわ……」

部屋に行ってみると、ルカが青い顔をして丸くなっていた。

「ルカ!? どうしたの!?!」

私は慌ててルカに駆け寄って身体に手を当ててみる……けど、特に熱があるわけでもないし、おなかを壊しているわけでもないみたい。震えもないし、発汗もない。体調が悪いわけではないみたいだった。よかった……なんともなくて。

「……どうしたの?」

ほっと一息ついて、今度は『また何かやらかしたんだろうか』と思いつつ、声のトーンを切り替えて問いかけた。

先週も、ルカは授業中に勢い余ってガラスを割ってミライさんに怒られてたからなあ……。フレンズ達もテスト期間だから多少大人しいとはいえ、また何かやらかしても不思議じゃない。

「て、てすが……」

と、別の方向性で身構えていた私だったけれど、そんなルカのうめき声を聞いてようやく完全に肩の力が抜けた。テストって……。

「なんだ、びつくりした……紛らわしいよ、ルカちゃん」

「あによその反応! こっちは大ピンチなんだからね!」

でも、ルカ的にはその反応はあまり嬉しくなかったらしいぷりぷりという擬音が聞こえてきそうなくらい頬を膨らませながらそを曲げてしまう。大げさだなあ……。

「ごめんごめん。でも本当に、フレンズのテストなんて『一応やってみてる』だけでしょ？ いいことに越したことはないけど、悪かったからってそんなに落ち込むことでもないような」

「それがね、聞いてよー！」

私がそう言うと、ルカは待つてましたとばかりに愚痴を言い始める。

恨み節とか鯉節とかが入り混じって要領を得ないルカの話を要約すると、問題は以下の通りだった。

抜き打ちテストの結果、多くのフレンズどころかクラスの殆どのフレンズが赤点をとってしまい、『お勉強はヒトの社会を知る足がかりですよ』というスタンスだったミライさんも、流石に『これはヤバイんじゃないか』と思ったらしく。

そこで、定期テストで赤点をとってしまったフレンズは、ヒトのクラスと同様『特別課外授業』を課すことにしたとかで。

さらにミライさんの曰く、『特別課外授業はフレンズの皆さんにとつてはちよつと大変かもしれないですから、お勉強頑張りましょうね』とのことだった。

それを聞いたルカはもう大変。

私はまず赤点なんかない（ルカにそう信じられてるのはとても誇らしい）し、前回の抜き打ちテストではしつかり赤点をとって罰ゲームだった以上、今回もマジで頑張らないと赤点をとって、大変な特別課外授業を私の助け抜きでやらなくてはいけなくなってしまふ！（私の助けを頼りにしてくれてるのはとても誇らしい）と思っただけそうなの。

「へえ、なるほど、ふーん」

私は気を抜くと緩みそうになる口元を手で覆って隠しながら、考える。

そこまでルカが特別課外授業を嫌がっているなら、もちろん友達！である私としては、ルカの手助けをすることはやぶさかではない。ルカが分かるように噛み砕きながらテスト勉強を教えてあげたりするくらいは、まあお茶の子さいさいだ。

ただ……。

「……どしたのセツナ。なんか悪巧みしてそんな顔してるけど」
「そんなことないよ」

ただ。

前回抜き打ちテストのときに勉強を教えたら、速攻で寝てしまったルカのことだ。今回も眠気に負けてろくに勉強できず、結果赤点……ということも当然ながらあり得るだろう。

そうなれば結局、ルカは私のいない『特別課外授業』を頑張らねばならなくなる。……その危険性についても、当然考えておいた方がいいだろう。

つまり。

不確実な『ルカの点数を上げること』を考えるより、確実な『私が赤点を取ること』を考えた方がいいのではないだろうか。

『特別課外授業』があらうと、ルカと一緒に私は別に苦じやないし、むしろ『特別課外授業』と銘打っているわけだから普段では経験できないようなことを学べるいい機会かもしれない。ルカは私という助けを得られるわけだから、まさにウィンウィンなたくらみと言えるだろう。

だからこれは悪巧みじゃなくて善巧みだよ。

「悪そうな顔してる……」

「失敬な」

ちよつと顔をもにもにして表情を調整しつつ、

「まあ、今更勉強してもしょうがないしね……。むしろ、ルカちゃんは今気分屋なところあるから、変に勉強して疲れがたまったら、明日余計にだめになつちやう気がするよ」

「そっかあ……。確かに」

私が言うのと、ルカは素直に頷いた。……まあ、これは実際嘘ではないんだよね。ルカに無理に勉強を教えたら、絶対にそうなるし。

「でも、じゃあどうやってあかてんを回避すればいいのよ!?!」

「そっちなあ……」

別に私的には一緒に赤点をとればいいんだけど、ルカがこう言うてる手前、『一緒に赤点とろうよ!』って言うわけにもいかないし……。

何か適当な勉強っぽい遊びでも提案するところなんだけど……何にしようかな。

あ、そうだ。

「いいこと思いついた。ルカちゃん、『睡眠学習』っていうのやってみない?」

「すいみんがくしゅう?」

私の言った言葉を繰り返して、ルカは不思議そうに首を傾げた。

私は頷いて、

「そう。簡単に言うと、寝ながら勉強ができるんだよ」

「何その大発明!」

思った通り、ルカはすぐに食いついた。

「どうやるの!? すぐ教えなさい!」

「簡単だよ。ルカちゃんはそこで寝ればいい。私が、寝てるルカちゃんお耳元で勉強を教えてあげるから。そうすると、ルカちゃんが寝ている間に私が教えた内容を聞いて、それが身に着くという勉強法なんだよ」

「そ、そんなことでもいいの……!?!」

私の説明に、ルカはすっかり戦慄しているようだった。まあ、そうだろうね。私だって寝てる間に友達が勉強を教えてたらそれが身に付きました! なんて言われたら『ええ……』ってなるだろうし。

「それが本当ならわたし、今度から授業ずっと寝るわよ! わたし夜行性だから昼間はちよっと眠いのよね」

「それはダメだよ」

授業は起きて聞くものだからね。

「なんでよ! すいみんがくしゅうでしょ!」

「ルカちゃん。睡眠学習はね、既に知ってることを復習するのに使うものであって、全く知らない新たな概念を勉強するにはあんまり向いてないんだよ」

「な、なるほど……」

私は睡眠学習なんてやったことないから完全に適当だけど。

「さ、そうと決まればルカちゃん。私のお膝で寝るがいいよ」

「え？ 膝で寝る必要あるの？」

「あるの」

主に私が、ルカの寝顔を間近で見られるし。

という本音は胸に秘めつつ膝をぽんぽん叩くと、ルカは怪訝そうな表情を浮かべつつも私の膝に頭を置く。もふもふした耳がぴくぴくと私の太ももをなでて、少しくすぐりたい。

「えーと、ルカちゃんの今やってる単元は——」

私はルカの髪の毛を指で軽く梳きながら、記憶にあるルカの勉強した範囲の内容を暗誦し出す。

ほどなくして眠りの世界に落ちたルカに視線を落としながら、私は至福の時を過ごしたのだった——。

その7：あかてん

「な、んで……」

絞り出したような声が、鼓膜を響かせた。

それが自分の声であることに気付くのに、私はたつぷり一〇秒の間を要した。

現実感がない。ふわふわとした足元は、そのまま私の現実にしがみつく力のなさを示している。気を抜けば思考を投げ捨ててここから逃避してしまいそうなほどに、私は追い詰められていた。

「なん、で……」

現在地は、学校の廊下。

テストの返却日。

完全なる作戦を遂行したはずの私は、今まさに掛け値なしの絶望を味わっていた。

目の前には、誇らしげな表情でピースサインをするルカの姿。

その手には、見事赤点を回避したテストの答案用紙が握られている。

そして私の手には、もくろみ通り獲得した赤点の答案用紙が。

「ふっふーん！ すごいでしよう！ すいみんがくしゅう！ わたしもちやーんとやればできるのよー！」

私の作戦は——ある意味ではこの上なく成功していた。

睡眠学習。

眠っているルカに、授業で習った内容を丁寧に読み聞かせてあげた結果、ルカの成績は跳ぶように伸びた。おそらく耳のいいサーバルキャットのフレンズだから余計に睡眠学習の効果が向上したとかそういう話があったりするのかもしれないけどそんな与太話はどうでもいい。

今回、この局面。

重要なのはこの一点だけだ。

私が赤点を取って、ルカは赤点を回避した。

この結末が意味することは——ただ一つ。

目で揺れたメンタルをそんなくだらしない発想で均衡化しようなんて、そんな体たらくだから私は、私は……！

「あ、あのー……セツナさーん？ 私が横にいるんですけどもー。セツナさーん??? 大丈夫……？」

「……え？ ああ、ナナ……いたんだ」

「いたんだって……ひどいよー！」

全然気付かなかった。っていうか結局ナナも赤点だったんだ。

「他にもけっこういるみたいよ。ヒトは私とセツナ二人だけみたいだけど……フレنزはたくさん、っていうか、殆どのフレنزじゃないかな？ ルカちゃんは……いないみたいだねー」

「…………ルカはきちんと勉強して赤点回避したからね…………」

「……おおう、さつきからのテンションの原因はそれか」

ルカがない特別課外授業だからテンションが下がっているみたいに話を矮小化しないでほしい。……いや、矮小化ではないか。実像はもつと卑しいものなんだし……。

「ま、取っちゃったものはしょうがないし！ 周りにフレنزがいっぱいってことは、色んなフレنزと仲良くなれるチャンスってことだよ。気楽に考えよー！」

「う、うん……そうだね」

ただ、流石の私も今のナナが私に対して気を使ってくれているということは分かる。

私が今この場所にいるのは完全に自業自得の結果なわけだし、その自業自得がもとでナナに嫌な思いをさせるのは、私の落ち度をナナに押し付けているようなもの。今は、無理やりにも気分を切り替えて、目の前の特別課外授業に目を向けないと。

「はい、皆さんこんにちは〜！ ……って言ってもさつきHRでも会いましたね」

と。

そうやってようやく気を取り直したところで、私たちの前に赤と青の羽が刺さった綺麗なつば広帽を被った女性が現れた。

眼鏡をかけた、緑髪の女性——私の憧れの人であり、この計画の監

督を務めるパークガイドでもある、ミライさんだった。

「今回は特別課外授業にお集まりいただきありがとうございます！」

……ってこの言い方はちょっと違いますね」

苦笑して、ミライさんは照れ隠しなのか帽子の紐を軽くいじる。周りのフレンズからは、ちよこちよここと笑いが生まれていた。

「今回、テストで赤点だったフレンズさんとヒトの生徒さんに集まっていたのですが……ナナさんはともかく、そちらのセツナさんはちよつと事情が異なるので、前以てフレンズの皆さんには説明しておきますね」

……？

なんだろう。私はただ『今日の放課後特別課外授業をやりませ。できれば来てくださいね！』としか言われていなかったけど、ナナはともかく私は事情が違う……？

「実は今回——唯一フレンズさん達の中で赤点を回避したルカさんですが、ルカさんは実は、本当にカンニングをしていませんでした！」
そう言うと、フレンズたちの中にわかにもよめきが起こった。なんだろう……話の筋が見えてこないけど、これはあれだろうか。私の知らないところで唯一赤点を回避したルカにカンニングの嫌疑がかかっていて、その嫌疑をこの場でミライさんが晴らしたってことなんだろうか。

「なんて失敬な！ ルカはカンニングなんてする子じゃありません

!!!」

「ひえっ、ええ、はい。それはもう！ 分かっていますよセツナさん！ どうぞ」

「す、すみません……」

しまった。ついつい熱くなってしまった……。

「それで、ルカさんになんて赤点を回避することができたのか？ 尋ねてみたところ、面白いお話を聞かせていただきました」

私を宥めたミライさんは、そのまま語り始めた。

「なんでもルカさんが赤点を回避できたのは、セツナさんが勉強を教

えてくれたからだそうです。なんでも睡眠学習がなんとかって話でしたが……」

そこまで言うと、ミライさんはわたしの目を見て、私に向けて状況の解説をしてくれる。

「聡明なセツナさんなら理解していると思いますが、フレレンズの皆さんはまだヒトの社会に慣れていません。当然ながら、フレレンズの皆さんにあった『系統だった勉強法』もまだ確立できていないんです」

確かに。

明らかに小学校一年生レベルの内容だったにも拘わらず、ルカ以外のフレレンズが全員赤点をとってしまうというこの事態。

入学から一か月も時間があつたにもかかわらずこの体たらくということは、もしかしなくても『フレレンズにあつた学習法ではなかつた』ということなのだろう。

とはいえ、リユニオン計画はテストで点をとれるようにすることそのものではなくその『学習法を見つけること自体』が目的だろうから、現状はそう悪い状況ということでもないと思うけど。

「そんなとき、ルカさんの学力を劇的に向上させたセツナさんのことを知ったわけです。セツナさんは赤点ではありませんでしたが、是非ともその勉強法を伝授していただきたい！ ということで今日はご足労いただきました。来てくれて本当にありがとうございます！」

「ちよ、ちよつと待ってください」

事情は、完璧に理解できた。

でも、ちよつと聞き捨てならない箇所があつたような気がする。

『セツナさんは赤点ではありませんでしたが』って……どういふこと？

確かに私の回答は一問ずつ全部ズレていたはず。意図的にズラしたのだから間違いない。実際に解答用紙にはズレていた箇所は全部×がついていたし、点数も赤点の水準だったはず。

「私、赤点でしたよ？ ここに呼ばれたのもそれが理由だったので……」

「あれ、私言っていましたよね？」

首を傾げた私に、ミライさんはさらに首を傾げ返してきた。

『回答が一問ずつズレていましたが、それを無視すれば全問正解だったので、ズレていた一問分と「回答用紙を正しく書けなかったペナルティ」の分を除いて通常通り採点します』って」

……え……？

「学校で教えているのは『正しい回答を回答用紙に書き込むこと』ではないですからね。当然です。ただ、一応特例措置ではあるので、書類上の手続きのみそういう形にするということで、答案用紙には反映させられませんよ——と言っていたと思うんですけど……」

……き、

聞いてなかった!! 思惑が完全に空振りしたこととか、ルカと一時的にとはいえ離れ離れになることになったショックとかで、完全にミライさんの説明を聞き流してた!!

そ、そんなことがあったなんて……。ふ、不覚。完全に不覚だった……。私は馬鹿か……。

というか、私の当初思い描いていた作戦は完全に失敗してたんだ……。ジャパリアカデミーの柔軟さをちよつと甘く見てたかもしれない。機械的な採点かと思いきや、こうまで総合的に見てくれるとは思ってもしなかった……。

「どうやらその様子だと、誤解もとけたようですね! それで、改めて今回の件をお願いしたいのですが……」

「……受けます。はい、すみませんでした……受けさせていただきませす」

赤点じゃない以上、特別課外授業に出席する理由も義理もなくなつたわけではあるんだけど、まあここまで来てしまったわけだし……あと完全に私情でここまで取り乱してしまつたうしろめたさとかもあり。

私は、特別課外授業における『講師役』を受けることにした。

「おおー! セツナ先生ね! よろしく先生!」

「ちなみに、ナナさんは完璧に普通の赤点なので、セツナさんと違つてきちんと反省しましょうね」

「うっ……」
ナナは本当にね。

その8：つながり

ミライ先生の誘導で特別課外授業の講師役となった私は、ホワイトボードの前に立って、大勢のフレンズを目の前にしていた。

校庭でホワイトボードを背にするっていう絵面もだいぶおかしいんだけど、フレンズの中には座ってじっとしているより動き回ってる方が集中できるって子もそこそこいるらしいので（ルカとかもろにそういうタイプだし）、そういう子への配慮という面もあるんだと思う。

……うう、でも大勢の子の前に立つって、緊張するなあ……。こうやって目立つ立場にいるのは、私のキャラではないのですごく恥ずかしい。上手くできるか心配だな……。

「え、ええと。まず今日は、ルカに教えた勉強の方法をみなさんに説明したいと……。思います」

何せここに来るまでは自分も『特別課外授業を受ける側』だと思っていたから、何を話せばいいかとか全然考えてなかった……。

「わーい！」

「すいみんがくしゅーって何をするのですわ？」

「すいみんと言っているのだし、寝るんじゃないか？」

「寝たら勉強できないじゃない？」

「うーん、考えてたら眠くなってきたねえ」

わいわいがやがやと、フレンズ達は私の一言に反応して際限なく各々の感想を飛び交わせている。なるほど、一度の発言でこんな状態になっていたら、授業もなかなか進まないよね……。

かといってフレンズの皆に『人の話は静かに聞くように！』みたいなことを伝えるのも難しいだろうなあ……。元は野生動物なんだし、それにここにきているフレンズの皆に『人の話を静かに聞く文化』が浸透したとして、それじゃ『フレンズの考え方をヒトに合わせた』だけではない。

その程度ではユニオン計画の目的である『フレンズとヒトの共存』には不十分だと思う。あくまでフレンズがフレンズとしての習慣を保ったままヒトと暮らしていける方法を模索するのが、この計画の真

意なんだから。ヒトの習慣にフレンズの方を合わせたとしても、それじゃ早晩うまくいかなくなるに決まってる。

「ええと……ええと！　睡眠学習とは！　簡単に言うと、寝てる間に誰かに耳元で勉強を教えてもらうことです！」

なので、私は考えた結果……とりあえずこれだけ分かっているだけでもいいということだけ伝えることにした。

私が一言そう告げると、思った通りフレンズたちはがやがやと話し出す……けど、一番に伝えたいことは伝えられたので、もう肩の荷はいくらか降りていた。

「寝てる間でも、音の情報とかは耳を伝わって脳に入っていくので……それを寝てる間中繰り返し返せば、自然と脳の中に定着して、勉強ができるようになる……ということなんじゃないかなと思います」

そして、補足情報。ここは私も正直自信がない。だってヒトだって寝ながら講義の録音を聞いたって頭がよくなるとは限らないんだし、それですべてのフレンズの学力が大幅に向上するならミライ先生だって苦労しないと思う。

「はい！　セツナさん、ありがとうございます。……ということで、今日はみなさんで『睡眠学習』にチャレンジして頂きたいと思います！」

私の説明から進行を引き継いだミライさんの号令に、フレンズ達は一様に『おおく』と感嘆の声を上げた。

特別課外授業ということで色々きつい思いをするのを覚悟していただろうし（実際にルカは特別課外授業といえばきついのでいやだみたいなことを言っていたし）、それが一気にお昼寝イベントに変わったから嬉しいというのもあるんだろう。

「具体的な方法はさつきセツナさんが説明してくださいましたとおりです。皆さんにはこれから三〇分ほど寝ていただいて、その後小テストをやってもらいます。点数は関係なく、『テストを受ける』ということ自体が大事なので、不安なフレンズさんは心配しなくても大丈夫ですよ」

ミライさんがそう言うと、フレンズ達の中からいくつか安堵のため

ののののの

まず大前提として、私は睡眠学習というものが眉唾モノの勉強方法だと思っていた。

中学時代に同級生が一夜漬けすら諦めた時の言い訳として『もう睡眠学習に頼るしかー』なんて笑いながら言っていたけど、普段勉強せず、テスト前一週間だけ勉強に取り組んで、テスト前日に『何もやってない』とくだらない嘘をついてへらへらしていた人間が私より正しい点をとっていた試しがないので、睡眠学習の効果なんてたかが知れている。

それに、情報源^{ソース}の記憶が定かじやないのではつきりとしたことは明言できないんだけど、前に睡眠学習の理論自体が間違いつて文献をどこかで読んだことがあるし。そういう意味でも、ヒトにとって睡眠学習が有効な勉強法であるというエビデンスはけっこう脆い。

ただ、実際にルカは壊滅的な状況から点数を上げてきているので、ここにヒトとフレンズの差があると思う。

たとえば、フレンズの中でも聴力に優れているフレンズは、野生のときの習慣で寝ている間も周囲の音を敏感に聴いていて、そこに勉強の内容を吹き込まれると野生の時の習慣もあつて余計に内容を吸収できる……みたいなの。

この仮説だと聴力に優れていないフレンズにこの勉強方法は効果をなさないってことになるけど、それはそれで『系統だったフレンズの勉強法の研究』としてはフレンズによって勉強法の向き不向きがひとつ判明するのでもいいことだろう。

「——つまり一十一というのは林檎一個を持ったフレンズにもう一個林檎を手渡したということと同じで——」

なんてことを、雑魚寝しているフレンズ達の間を歩きつつ教科書を解説しながら、私は考えていた。

なんというか、こうしているとようやく『リユニオン計画』の被験者としての役割を果たせているなって気分になるんだけど……。……今この瞬間も、私のいないところにルカがいるのかと思うと、なんだか気持ちが落ち着かない。

ルカは何をしているんだろう。そのことばかり考えてしまっている自分がある。この期に及んでそんなことを考えてしまう私は、やっぱり計画の被験者としては落第生なんだろうなあ……。

「……せめて、ここにルカがいてくれたらなあ」
ぽつり、と。

ふと、そんな呟きが心から漏れていた。計画の被験者として落第生でも、ルカと一緒にいる為ならそんな自己矛盾も乗り越えられる。ルカと一緒にいられるなら、多分私はどんな悪徳だって呑み込める。

でも、そのルカをこの場から脱させた原因は私にあつて……本当は、ままならない。

「呼んだ？」

「るっルカあ!？」

と、その瞬間背後からルカの声が聞こえて、私は振り返る前からルカの名前を呼んでしまった。

そして振り返ってみればそこには確かにルカがいて、なんだか得意げな表情を浮かべていた。

「る、ルカちゃん……。びつくりした。どうしたの、こんなところで。赤点は回避したからルカは呼ばれてないんでしょう?」

「まあ、ね。でも、わたし以外のフレンズはみんな校庭に集まっているよ? しかもセツナは先生役になっててヒマだし……。別に赤点とってないから来ちゃだめってことでもないじゃない。だから遊びに来たの!」

……………。

「も、もお。今はみんな寝てるから、起こさないように、遊ぶにしても静かに……。だからね?」

そう言いながら、私は笑みを抑えるのに苦労していた。

いや、やっぱり抑えるのには失敗していたかもしれない。だって……だってそうじゃないか。ルカが、私がいらないからヒマって! それってつまり、私と一緒に遊ぶ時間がそれほど大きいってことだよ。ね。そう考えても自惚れじゃないよね。ルカにとって、私っていう存在はもうそこまで大きくなったってことなんだよね。

ルカにとっては、セツナっていう存在が友達ってことになったんだよね。

「……………セツナ!? どうしたの!？」

「ちよつ、ルカちゃん静かに……………声小さく……………」

突然大きな声を出したルカを宥めて、私はあたりを見渡す。……………よし、目を覚ましてる様子のフレンズはいないみたい。よかった。

しかしルカつてば、いきなりどうして大きな声を出したりしたんだろう……………と思いついたところで、私は自分の頬に冷たいものが伝っていたことに気付いた。

「セツナ……………」

「あれ? あ、れ……………?なんで私泣いて……………?」

な、泣く理由なんてないよね。何せルカに必要とされてるっていう超絶テンション上げポイントが出た直後で、私としては『セツナとして仲良くなる』っていう当初の目的も達成されて万々歳なわけ……………。

……………あ、そつか。これ嬉し泣きか。確かに、嬉しすぎて感極まってしまったというパターンは考えられる。

ただ、ここで嬉し泣きするほど喜ぶというのはルカにとっては不思議だと思ふから、なんとか誤魔化さない。

「多分、みんな寝てるから眠くなつてきちゃったのかな! いけないね、ちゃんと睡眠学習の手伝いをしないとイケないし」

私はそう言つて、頬を伝っていた冷たいものを拭う。さあ、リユニオン計画被験者としての務めを果たさなくては。ルカも一緒にいることだし!

……………あ、そうだ。

私はもう『セツナ』なんだから、ルカちゃんって呼ばないと。

その9：よびかた

「ふうー……ごめんねルカちゃん、結局最後まで手伝ってもらっちゃって」

一通りの『特別課外授業』が終わった後。

ミライさんにねぎらってもらった私は、最後まで手伝ってくれたルカちゃんにそう言った。ルカちゃんは疲れたような顔をして、じつと私の方を見る。

「——べつに。このくらい全然いいわよ。というか！ セツナがいなかったらわたしヒマに決まってるじゃない！ なんでもっと早く教えてくれなかったのよ。お蔭でかなり探し回ったんだから」

「あはは……ごめんねルカちゃん。私にとつても、色々急な話で」

何せ最初は、私だけ赤点だったと思つて完全に頭が真っ白になつたからね……。

「ま、いいけど。結局最後には追いついたしね！ まったく、ミライさんもわたしに教えてくれてれば話が早かつたのに」

「ミライさん、意外と抜けてるところあるからねえ」

なんというか、動物が好きすぎるあまり暴走しがちつていうか？

わたしも似たようなところあるから気持ちは分かるし、この『リユニオン計画』の引率役にするにはこれ以上ない適任だと思うけど。

あれで動物に関する知識は本当にすさまじいからね……私もこの間分らないことがあつたから質問したけど、さくつと答えてもらつた上に聞いたこともないような知識を雑学みたいにぺらぺら話されたし……。

絶対、ジャパリパークの外なら普通に博士としてやっていけると思う。適当に話していた雑学のエビデンスを改めて取れば、普通に論文を何本も書けるレベルだし……。

「そういうえば、私にも事前に教えてくれててもよかつたのに。突然話されたから……」

「話されたから？」

色々混乱した——と言いそうになつて、やめた。

確かに、当日講師役を依頼するのは（あくまで小学一年生レベルの内容を読み聞かせするだけとはいえ）あまりにも急だし、そういう意味ではミライさんの根回しが足りなかったと言えるかもしれないけど……それは別に、普通なら動揺するようなことではないからだ。

そこで必要以上に取り乱したのは、私がルカ——ちゃんと一緒にいられないと思ったから。『そこまで驚くようなことでもなくない？』なんて言われたら、その説明が難しいと思った。

「……ううん。なんでもない」

「…………そ」

あまりうまくごまかせなかったけど、ルカちゃんは意外にもあつさり私の言葉を流しながら立ち上がった。

「じゃ、わたし今日はこのまま帰るわ。セツナもなんか疲れてるみたいだし、今日は早く寝るのよ」

「うん、分かった。また明日ね、ルカちゃん」

ルカちゃんの言葉に頷きながら、私も立ち上がる。確かに、今日は色々頑張つて疲れた……。早くご飯食べてお風呂入つて寝たいくらいだ。

なんてことを考えながらぼうつとしていた私に、ルカは去り際——こんなことを言ってきた。

「——ねえセツナ。いい加減その呼び方、やめない？」

のののののの

その9：よびかた

のののののの

「…………ねむい」

あんなことを言われて何も考えず『うん分かったー☆』と即答して『やったールカって呼び捨てだぞー♪♪』なんて喜びながら熟睡できる奴がいたら、そいつは多分人間ではないと思う。単細胞生物でももう少し複雑な反応を示すはずだ。つまり単細胞生物以下だ。

「……セツナ、結局あの後寝てないの？」

「いつつまいぶれじやー!」

……ちよつと甘い顔すると調子に乗って抱き付いてくるのはウザいけど!

の の の の の

「今日も今日とてフレンズの皆さんと交流の授業ですよ」

今日は一限からフレンズの皆との合同授業だった。今日のカリキュラムは――ずばり『水泳』。泳ぎも苦手なフレンズもいる中で、ヒトと一緒に泳ぎを学ぶことで『ヒトの動き』を学習し、ヒトに対する理解を深める……とかなんとか、ということらしい。

その性質上ヨーロッパのロップやジャイアントペンギンのアンはじめ、水生のフレンズにとってはあまり実りある授業とは言えないかもしれないけれど……それはそれとして、皆事実上のレクリエーションタイムに胸を高鳴らせていた。

「セツナ! どど、どうしよう! わ、わたし……泳げないんだけど!?!」

「どうどう、落ち着いてルカちゃん。足は着くから。というか滝壺潜りとかやってなかったっけ最初の方」

「そのへんは潜るだけで泳がなくてよかったし……あと泳げるフレンズのしっぽにつかまってたし……」

あ、ズルしてたのか。ラッキービーストが撮影していたとはいえ、水の中だと細かいところまでは映らないもんね。現に私もいまいちよく見えてなかったし、泳げるフレンズにつかまって移動するというのは気付けなかった。まあ私に言っちゃ片手落ちだけど。

「ルカちゃん、ズルはダメだよ」

「ず、ズルじゃないわよ! あおときはそういうものだって知らなかったの! 知ってたらやらなかったし! それに今泳ぎ方覚えるから!」

ルカは恥ずかしそうにしながら、プールサイドに座り込んでおそるおそる足を水につける。

ちなみに、ルカの現在の恰好はフレンズ特有の服装ではなく、私と同じく競泳水着。ほかのフレンズも水生のフレンズ以外は大体競泳

水着に着替えている。

唯一ジャイアントペンギンのアンだけは、そもそもデフォルトの服装が水着っぽいという……。水生のフレンズの中でも本格的に水の中で暮らしているフレンズは、服装が水着になりやすいのかな？

「つめたっ……！」

あたりを見渡しながらルカが水に入るのを見ていたけど……一向に中に入ろうとしないルカに、私の心の中でいたずら心がむくむくと湧いてきたのを自覚した。

目の前の水面に視線が釘づけなルカに気付かれないように私はプールに入り、そして手で水をすくって……、

「えいつー！」

「にやっっ!?!」

ばしやり、とルカの顔にかけてやった。

突然の攻撃に、ルカはまるで鳩が豆鉄砲を食ったように目を丸くして変な声を上げる。

「にやつ、な、何すんによセツナっ！ ええい……このお！」

怒ったらしいルカは顔を真っ赤にしてプールの中に飛び込みそして私につかみかかる。……わっ！ 力がマジだ！ 顔面にめっちゃ水かけてくる！

「うひゃ、ごめ、がぼぼぼ……！」

「このー！ このこのこのお！」

「ルカちゃん、水、水……！」

「このこの……へ？」

ギブアップのときにマットをタップするような感覚で水面をタップしている、ルカが不意に我に返った。

そこで私はドヤ顔をきめて、ルカにこう言う。

「——ほら、ルカちゃん。水、入れたでしょう？」

「せ、セツナ……！」

そう、これこそ私の考案した荒療治。怒りに身を任せて水の中に入ってみたら、意外と普通に動けるし大丈夫じゃん！ という成功体験によって水への苦手意識を吹っ飛ばそう大作戦である。大成功！

これにはルカも私の深謀遠慮を察して感動し、

「……つてなるわけないでしょ！　びつくりしたじゃない馬鹿！」

……なかった。

まあそうだよね。

「ごめんねルカちゃん」

「別にいいけど……」

「こらーその二人とも、あんまり暴れてはダメですよー」

「はい」

と、ひと段落したところで監督していたミライさんに怒られてしまった。失敗失敗。

「もう。おかげでミライさんに怒られちゃったじゃん」

「そこもごめんねー」

「……でも、珍しいわね。セツナがこうやってやんちやるなんて」

「そうかな？」

確かに、そう言われてみればそうかもしれない。

……私って、基本的に優等生ポジションだからね、自分で言うのもなんだけど。

『確かに私優等生だもんね』みたいな顔してるけど、セツナけっこうヤバイ奴だかんね……」

「わっ、ナナ！」

と、そこで不意にナナが水に流されてきた。びつくりした。いきなり人の心を読むのはやめてよ。あと自室でのことを外で言うのはやめてよ。

「だってそうじゃん！　この間だって、」

「はくいく。そのへんにしときくなくく」

「ああああ……」

「ひとにはひとのペースがあくるのくさく」

あ、アンに連れてかれた。

あの二人、この間の抜き打ちテストの一件で引き合わせてから、妙に仲がいいよね……。

「あの二人、仲良いわよねえ」

「ねー。まあ、けっこう趣味も合うみたいだし」

部屋でけっこうアンの話をされるから、二人の趣味が合うのは知ってる。アイドルのこととかでけっこう意気投合しているらしい。

どうもそれだけじゃなさそうな雰囲気もなんとなく感じてはいるんだけど、そのところはナナもまだ話そうとしないので、話したくなったら話せばいいんじゃないかな、くらいに軽く思っている。ひとにはひとのペースがある。そういうことだ。

「で、セツナ」

ルカの声色が、真面目な表情をおびていく。

私はその言葉を、黙って聞いていた。

「昨日の話なんだけど」

「ごめんね、ルカちゃん」

私は先手を打って、ルカに答えを返した。

「……セツナ」

「私には……ちよつとまだ」

そう言つて、私はルカの表情を見る。

「……。……そう？　へんなの。なら別にいいけど」

……やっぱり、ルカの表情に含むところはなさそうだった。ただ単純に、『ちよつと他人行儀な呼び方をやめさせられなかった』という程度の残念さしか、その表情からは読み取れない。

だよね。そうだよね……そんな都合のいい話、ないよね。私は何を考えてたんだか……。

「……さー！　泳ごう、ルカちゃん！　私がみっちり泳ぎ方を教えてあげるよ！　目指せ泳げるネコ科！」

「ええ〜……わたし別にジャガーにはなりたくないなあ……」

その100：かちまけ

「セツナ！ プール行こう！」

「ええ〜……またあ？」

放課後。私がルカの部屋に行くと、ルカは開口一番にそう言った。先日プールの授業で初めて水泳を体験したルカだったけれど——そのときの体験がどうにも癖になってしまったらしく。それからこうして、ルカはたびたび私にプールで行くことを提案するようになっていた。

一応私も一通りの泳ぎ方はマスターしているし、タイムもそこそこ速いほうではあるけど……そもそもルカ、泳ぎへたくそだからなあ。何やらせても犬かきみたいになるし、溺れないように私がサポートしないといけないし、たまにやるならいいんだけど正直こう何回もやっていると、さすがの私も疲れてしまう。

「いいじゃない。プールって期間限定なんですよ？ ならやらなきや損よ！」

「ウチの学校は温水プールだから年中無休だよ！」

どこで仕入れてきたんだか（たぶん水棲のフレンズから聞いた話を混同してるんだと思うけど）分からないことを言うルカに至極真つ当な反論を試してみるけど、ルカは全く気にせず、むしろ居直ったように、「でも……このくらいのもあったかさのときに入るプールの方が楽しいでしょうが!!!」

と、断言してみせるのだった。そんな身も蓋もない……。

「確かに気持ちはわかるけどね」

とはいえ、ここ最近春というより夏って感じの日差しの日も多くなってきたのは事実だった。

ジャパリパークのほぼ全域にはサンドスター粒子が偏在している——ということは、此処に通っている学生なら全員が理解している。あのナナでも当然のように知っている、と思う。さすがに。

このサンドスターというのが曲者で、けものをフレンズに変えるだけならともかく、サンドスタープリンターで遊び道具を作ったりでき

るし……気温や日差しを変えたり、物質の経年劣化を抑えたりする効果も持っているのかなんとか。

起こりうる現象があまりにも多岐にわたりすぎてて、いったいどういう理屈なのか全然分からないんだよね……。私は別に物理学者になりたいわけではないので、サンドスターの仕組みなんて調べようとは思わないけれど。

「でしょ？　っていうか最近なんだか暑くなってきたわよね」

「確かに。……ルカは暑いの手？」

ふと気になつて尋ねてみると、ルカはバカなことを聞かれたとばかりに笑ってみせる。

「まさかあー！　アンタは知らないと思うけど、さばんなちほーの暑さはこんなもんじゃないわよ？　……確かにここの暑さはちよつとむしむししてて、さばんなちほーの暑さとは微妙に違うけど」

「いやではあるんだ」

「全然大丈夫だけどね!!」

……とのことなので、大丈夫ということにしておいてあげよう。

それに、暑いのが大丈夫だからって水浴びが楽しくないということにもならないしね。ルカもさばんなちほーにいたころは知らなかった水浴びの楽しさを知ることができてよかったと思ってるだろうし。

「っていうか、何よセツナ？　そこまでいやがるってことは……もしかして、泳げないの？　うぷぷ。エラソーにしといて実は泳ぎが苦手だっていうんならしようがないけどー」

……見え透いた挑発だった。

っていうか私、今までもルカと一緒にプールで遊んでたわけで、その私のことを間近で見てるからルカが私の実力を知らないわけじゃないんだし、そういう意味でもこれは見え透いた挑発なんだけど……。

……んー、しようがないなあ。

「……………言ったね？　ルカちゃん、そこまで言うってことは、私に泳ぎで負けたらそれはなんでも言うことを聞くって言うてるようなものだよ？」

ルカはそんな私の推測に心ばかりの否定をして、

「そんなことより！ さっきの話、忘れたとは言わせないわよ。泳ぎで勝負するんだから！ 勝ったほうは何でも言うことを聞くのよ！」
「ああ……そういえばそんな話だったような」

プールに行くまでちよつと歩いたから、微妙に忘れてた。

ちなみに——いくらルカが泳ぎへたくそとはいえ、さすがに身体能力はヒトとは段違いなので、まともに戦えば私とルカの泳ぎのスピードはどっこいどっこいだったりする。

まあフレンズの身体能力は五〇メートル走一・数秒とかの世界なので、そのフレンズが私（ちよつと運動が得意な程度の女子高生）と同レベルって時点で、ルカ基準ではかなり苦手な部類なだけだね。

「それじゃ、ルールどうする？ ここの端から端まで、とかでいい？」
「それでいいわよ。……ふっふっふ、これまでのわたしと同じとは思わないことね。今日はこれを使わせてもらおうからね」

言いながら、ルカは私の前に一枚の板を取り出した。黄色の半楕円形をしたそれは——いわゆるビート板と呼ばれるアイテムだった。

……ええ……。ルカつてば、あんまり勝てないからつてアイテムを使うのはさすがにどうかと……いやまあ、確かにルカはろくに泳げないわけだから、安全のためにビート板使うのはアリっちゃありだと思うけどね。

でも本当、勝ちに来てるんだな……。ルカ。それなら私も、本気出さないよ。

「いいけど……。ルカちゃんだけハンデがあつたらフェアじゃないからね。その分私は二メートル距離を縮めさせてもらうよ」

「……、ええっ!？」

ちよつと間があいたけど、私の宣言にルカは目を丸くする。当然でしように。何も無い状態でどっこいどっこいなんだから、ルカにだけハンデがあれば私が負けるにきまつてる。正直、二メートルでもまだ私が不利なくらいなんだから。フレンズの身体能力を考えれば五メートルはほしいくらいだ。

まあ、私は別に勝負に負けてルカのいうことを何でも聞くことに

なつたとして、特に問題ないから……勝つことにこだわってはいないけどね。

「……しょ、しょうがないわねー。まあそれでいいけど……」

ルカは完全に無理していると丸わがりの棒読みでもってそう答え、プールの中に入る。

私もそれを追って入水し、二メートルほど先へ移動した。

……あ、今気づいたけどこの位置取り、私壁を蹴ってスタートダッシュできないから、むしろ不利なくらいなのは……。

「さあー、始めるわよー」

なんて気づいても時すでに遅し。

ルカの号令とともに、私たちの何度目か分からない水泳勝負が幕を開けたのだった――。

のののののの

「ま、負けた……」

結果は――意外にもルカの惨敗だった。

というのも、ルカはビート板の使い方を根本的に理解しておいらず……。おなかの上のせて水をばしやばしやしていたんだけれども、そうすると身体が完全に浮いてしまうので、ルカのネコかき遊泳スタイルだとただ四肢で水面を叩くだけになってしまい……むしろ、推進力が完全に失われてしまったのだった。

「ど、どんまい、ルカちゃん……」

「くう、こんなはずじゃ……アンに色々教えてもらって、これなら勝てると思ったのにい」

あ、ビート板はアンの入れ知恵だったのね。道理でルカにしては知能の高い戦法だと思った。アンは普通に賢いからね……。

ただ、悔しがっているところ悪いけれど――勝負は勝負だ。『なんでも言うことを聞かせる権利』をめぐる私とルカは勝負して、そして私が勝利した。これは動かしがたい事実で、いくら私がルカに甘いといっても……その部分を動かすことはできない。

「さあ、ルカちゃん。約束の件だけど」

「ん、ああ、そうだったわね。なんでも言ってみなさいよ」

「……………意外とあっさりだね?」

思ったよりもすんなりと言うことを聞く態勢に入ったルカに、私は思わず首をかしげてしまう。ルカの性格なら、本気で勝負を挑んでいたら三回くらいは再戦を申し出てきたと思うけど…………。

「べ、別に特に理由なんてないわよ。今回あんまりにもボロボロだったから…………」

「ああ…………」

言われてみれば、確かに今回はビート板のせいでいつにもまして泳ぐのがダメダメだったし、そのことで戦意が削れてしまったというのはありえるかもしれない。いや、にしてもルカにしては殊勝な態度だと思うけど…………いやいや、それはさすがにルカに対して失礼でしょ。

「で、何にするの?」

「んー、そうだなあ…………」

急かされるように言われて、『これって立場逆だよなあ…………』と思いつつも私は考えてみる。

…………こういう風に急かしてくるってことは、私が妙なことを言い出すとは思ってないってことだよなあ。私、信頼されてるんだな。うふふ。

「…………セツナ?」

「はっー! いやなんでもない、なんでもないよ」

ちやんと考えないと。うーん…………言うことを聞かせられるとしたら…………何にしよう?

もつとちやんと勉強する? いや、ルカだって今も一生懸命勉強してるしなあ…………これ以上頑張らせるのは酷だし、それはよくない。

プールじゃなくて別の遊びもする? うーん、それも微妙かなあ。今はルカがプール遊びがしたいからいっぱいプールで遊んでるんだろうし、ルカがやりたい遊びなら、それを目いっぱい一緒に遊びたいというのが私の本音でもある。無理にやめさせるのはちよつと…………。

じゃあ…………なんだろう? 私がルカにやってほしいこと、何もない

気がする。もふもふしたいとかはいちいち頼まなくてもできるし……うーん……。

……。

……思い、つかないかな。

「ルカちゃん、あのさ」

「……………」

「そのお願い、保留……じゃダメかな」

私がそう言うと、ルカは一瞬ほかんと固まってしまった。

「いやね？ 今はちよつと言うこと聞かせるにしても特に思い浮かばなくてさ……だから保留」

「……、えー、なんかずるーい」

「あははは……ダメ？」

私が首をかしげてみると、ルカは不満そうにしながらも渋々頷いてくれた。

「しよがないわね……。まあ今更だし、もうちよつとだけ待っててあげる」

「ありがとね、ルカちゃん」

「早くするのよ？」

「うん、分かってるよ」

「ずずい、と詰め寄るようにして言うルカにちよつとたじたじとなりながらも、私は頷く。」

うーん……お願い事、何にしようかな。

その11：せんぼう

時は瞬く間に過ぎ、気付けば季節は夏真っ盛りになっていた。

ジャパリアカデミーのあるこのパークセントラルの季節は、サンドスターの影響で様々に気候の偏りが存在するジャパリアパークにおいて実にスタンダードな四季を形成している。

……実際にはジャパリアパークがある小笠原諸島周辺はけっこう緯度も低いから、亜熱帯気候なのが自然なんだけど……ここまでしつかりと『日本型温帯気候』が再現されてるのは本当に謎だと思う。

まあ、私は物理学者じゃないからサンドスターのアレコレにはそこまで興味ないけどね。

「あづいー……」

ともあれ。

夏がその本領を發揮していくにつれて、ルカはプールに入り浸るようになっていた。当然、私もそれに付き合っ、最近放課後になるとほぼずっとルカと一緒にプールにいる。おかげでだいぶ泳ぎがうまくなったと思う。速くなったわけではないけど……。

「ほんと、暑いよねー」

「潜ると気持ちいいぞおー？」

そして、ルカがプールに入り浸るようになったということは、ほかのフレンズがプールに入り浸るようになってしまったということも不思議ではない、ということ。

私たちの横でぶかぶか浮いているナナとジャイアントペンギンのアンを筆頭に、今やプールはちよつとしたフレンズたちの憩いの場となっていた。

これについてはミライさんも予想外だったらしく、『こんなことならもつとプールを豪華にしておけばよかったです……』と今年度中の増築を視野に入れていたようだった。いや今年度中で。いくらSSプリンタがあるとはいえ、いくらなんでもフットワークが軽すぎると思うんだけど……。

「でも、ルカ——ちゃんの暑がりっぷりは異常だナー。さばんなち

「ほー出身なら暑さも慣れてるんじゃないの？」

「さばんなちほーの暑さところっちの暑さは全然違うのよ……じめじめむしむしで、なんだかまとわりつくみたい暑い……」

「あー確かに、日本の夏はうっとうしいみたいな話、フレンズの子たちがよく話してるよね」

「うだー、と私にしなだれかかってくるルカに、ナナはそんなことを返していた。……ってというかフレンズの子たちとそんな話してたんだ。ナナってけっこう顔広いよね……。そのわりにアンとよく話してるけど。」

「というか、この頃はわたしがルカと一緒に遊ぶのと同じくらいの密度でナナはアンと遊んでいたりする。おかげで勉強の方がいい加減おろそかになってるのでほどほどに注意してたりもするんだけど……ナナは私みたいなのと違って特定の誰かとしか心を開かないってタイプじゃないから、実はちよつと意外に感じてたりする。」

「だって、ナナって入学して早々にクラスのフレンズみんなと仲良くなつてたからね。結局顔と名前もあつさり一致させてたし、何気にクラスの中心的な存在だし。そんなナナが誰か一人にここまで執着するとは思わなかった。私が知らない間にいったい何があつたんだろうか。」

「まー、その分プールが楽しくなるってもんだーけどねー。ぷかぷか浮かんでるのもいいんだーよー」

「アンは日焼けしないからねえ……。うらやましいわ、私なんて屋内プールでも日焼けクリーム塗ってるのに」

「わたしはヒトがうらやましいけどねー。フレンズは日焼けできんもんなー」

「言われてみれば。」

「プールに入る前もルカとはときたま外で遊んだりしてたけど、私は日焼けクリームガンガン塗ってても肌がひりひりしたのに、ルカときたら日焼けのひの字も感じさせない白い肌を維持し続けていたっけ。」

「あの時は羨ましいと単純に思っていたけど、フレンズからしてみれば。」

そんな彼女がパビリオンのことを知れば、行きたくなくなるのも当然と
いうものだろう。

しかし、ジャパリパーク・パビリオンは四か月という期間限定のア
トラクションであったことも手伝い、一般客はなかなか何度も行くこ
とができなかった。

もちろん特に頭がいいわけでもないナナは四か月間全部をパビリ
オンに費やすなどということはできなかったし、あくまで従姉が関係
者であるというだけの彼女は特別な優遇措置など講じてもらえるは
ずもなかった。

それでもパビリオンに行きたいと思った当時のナナは、その年の年
賀状にこう書いたものだ。『ぱびりおんにあそびにいきたいです。お
ねえちゃんおねがいます』と。

さすがの彼女でも、今にして思えば恥ずかしさを覚える、そんな稚
気じみた願いだったが——しかしその幼気な熱意は、彼女の従姉——
カコ博士の心を打つには十二分だったらしい。

小学校を卒業した三月七日、ナナの手元には一週間分のジャパリ
パーク・パビリオン優待券があった。

「どんなフレンズに会えるのかな！」

そんなふうにくわくわくしていたナナが一番最初にパビリオンで観
測したのは、みずべちほーだった。

というのも、まっとうに動物園に親しんでいた彼女にとって一番身
近な『ジャパリパーク』といえばサファリエリアではなく、アシカや
ペンギンなどがショーをするステージだったからだ。

みずべちほーのパビリオンは水場とそれに隣接するようにして作
られたステージが主な要素になっており、幼い彼女にとって一番親し
みやすい空間だったのだろう。

そしてそんなみずべちほーのパビリオンで、彼女は一人のフレンズ
に出会ったのだった。

『がさごそがさごそ。おー？　なんだこれ？　細長い棒みたいなのだ
ナ！』

小柄な体格。

大きく出た額。

灰色の長髪。

ぶかぶかのジャージ。

そして、不敵な笑み。

ジャイアントペンギンのフレンズだった。

『わっ!? 口に近づけたら声がおつきくなっただ!? ……むむ、そうか、ぱびりおんだっけ? もう始まってたのかー』

ナナが出したスタンドマイクを興味深そうにいじっては遊ぶその姿に、幼い日のナナも子供心に嬉しく思ったものだ。そんなジャイアントペンギンのために、タンバリンだとかステージだとか、いろんなものを出しては一緒に遊んだ。

……おもちゃを出すだけではあったが、ジャイアントペンギンとナナは確かにその日『一緒に遊んだ』のだ。

そして。

『……ん。どうやらもう今日はおしまいみたいだねー』

園内のスピーカーから『けものみち』が流れ出したのを耳にして、ジャイアントペンギンは遊びを中断した。

それに対してナナは何か答えたかったが、パビリオンのシステムでフレンズに思いを伝えることはできない。ナナはどこかの誰かのように、アイテムを大量に出すことで意思表示をするなんていう破天荒な解決法を思いつくような子供ではなかった。

だが、それで絶望するような子供でもなかった。

「……また。またいつか、一緒に遊ぼうね!」

ナナはそこで、未来に希望を見出すことのできる子供だった。

声が伝わるはずがない。相手に自分の思いが伝わるはずがない。その『はずがない』を踏み越えて——相手に伝えた自分の思いを信じることができた子供だった。

『また、縁があればナ!』

だから、相手にもその想いは伝わった。

結局一週間のうちでジャイアントペンギン——アンと一緒に遊んだのはその一日だけで、ナナもアンもいつしかその日のことを忘れて

しまう程度の、そんな一日でしかなかったのだが――。
しかし。

そこにあつた想いは、忘れることはあつても消え去ることはない。
そして消え去っていなければ、忘れた想いはいずれ思い出すこと
だつてできるはずだ。

のののののの

「――というわけでね、何度か遊んでるうちに、『あれ？ 私この子と
遊んだことあるんじゃない？』って気持ちになってきてき。それでこ
の間、思い切つて聞いてみたんだ。『アンって昔、パビリオンでマイク
とか使つて遊んだことない？』って！」
.....

そうして、ナナはアンとの出会いを思い出し、そして二人はそれを
きっかけにより親密な関係になった、ということ――らしい。

なるほど、そういう経緯があるんなら、ナナがアンと特別仲良くし
ている理由も、わかる。パビリオンっていう『下積み』があるわけだ
もんね。そのことを自覚したら、より仲良くなれるってわけだ。

うんうん。なるほど、なるほど.....

「ルカ」

「.....なに？」

「.....なに？」

そこまで衝動的に言いかけて、私は我に返つた。

ルカ.....そう呼び掛けて、私はそのあと、何を言おうとしていたん
だろう。『私たちも実はパビリオンで.....』なんて言う？はは
は、ナイスジョーク。

落ち着け、私。違うでしょ。ナナとアンはパビリオンで一日だけた
またま遊んだ関係で、そのあとは二人ともその日のことを忘れてい
た。リユニオン計画で偶然再会したのをきっかけに徐々に思い出し
て、そして旧交を温めた。全部偶然だ。そこに誰かの意図なんかな
い。ただの奇跡なんだ。

それに比べて私はルカを捨てて、自分勝手に現実逃避して、そのようなように打算してリユニオン計画に参加して、自分だけ覚えておきながら自分勝手に何もかも隠して、こうして自分だけが全てを知ったぬるま湯の友情で悦に浸ってるだけじゃないか。

前提が何もかも違う。だからここで二人の関係を羨ましがってナナ達の真似をするのは——ひどく、誠意に欠ける行為だ。

でも、ああ、でも……。

……………そうだ。私は、羨ましい。

私だって、私だって……。ルカと一緒にパビリオンで遊んだあの日のことを、ルカにも思い出してほしい。一緒にたくさん遊んでくれてありがとうって、突然一人にしてごめんって、ちゃんと言いたい。こんなバカみたいな隠し事なんかしないでちゃんと全部の私を表に出して、心の底から笑えるようになりたい。

……………本当はルカに本音を隠して『セツナ』を演じたくなんかない……………！

でも、それって身勝手に。

でも、こんなつらいのもういやで。

でも、そんなの自業自得で。

でも、私そんなつもりじゃなくて。

でも、そんなの言い訳にならなくて。

でも、でもでもでもでもでもでも——

!!!!

「……………。……………なん、でも……………ないよ。ごめん、ちよつと気分悪くなったから……………部屋に戻ってる」

その12：おねがい

私は……！ 私は、何をしているんだ……!!!

プールから出て、自室へ走っていく道すがら、私は内心で自分に激怒していた。

あんな風に飛び出して、今更何を言っても誤魔化し切れるわけがない。気が動転していたからって、あまりにも軽率な行動、

……いや、ひよつとして私は、そういう風にしてルカの気を惹きたいだけなんじゃないだろうか。そしてルカに私のことを心配させて、何を言っても受け入れられるような雰囲気にして、自分の罪をさも『今まで隠していて辛かったんです』とばかりに被害者面で語って、それで何となく許してもらおうと、この期に及んでそんなどうしようもないことを考えてしまっているんじゃないだろうか!?

ない……なんてとてもじゃないけど言い切れない。だって、わたしはただでさえ自分勝手にルカを振り回して、自分だけいい思いをしている前科がある。自覚がないだけで、本質的にわたしという人間は、ルカさえも自分が居心地のいい空間に居座るだけの舞台装置としてしか見れてないのかも……。

……ああ、浅ましい！ 浅ましい浅ましい浅ましい！

「セツナっ!!」

思考に気を取られていたからだろうか。乱雑に私の肩を掴む手で、走る足が止まった。ぐい、と引き寄せられて、私の視界いっぱいにはルカの顔が見えた。

ルカの表情からは、私のことを心配していることが一目で分かった。そのことに心のどこかで喜びと安堵を覚えている自分がいることに気づいて、吐き気がした。

「る、ルカ……」

そこまで言って、一瞬『ここでルカに嫌われるようなことを言えばいいのでは?』という選択肢に思い至った。

私は……私みたいな人間は、ルカには相応しくない。ルカを利用して自分だけが救われたいだけの人間が近くにいては、いつか絶対にル

カのことを傷つけてしまう。それならいつそ、ここで私がルカに嫌われてしまえば……今はルカも落ち込むだろうけど、幸い周りにはそれを支えてくれる友達がたくさんいるわけだし、まだ比較的浅い傷で済むんじゃないか。

そう考えて………そしてすぐ、酷い自己防衛っぷりに眩暈がした。

違うだろう、そうじゃないだろう、私。

現実を過小評価するな。私は、これまで、ルカと仲良くなるために必死でコミュニケーションをとってきた。本当に、必死で。今の私は、掛け値なしにルカが一番の友達だ。……だから苦しいんだから。そんな私がいきなり掌を返してルカに嫌われるような言動をとってみろ。ルカにとって私は『一番親しいヒト』なんだ。ルカにヒト全体に対するぬぐい切れない悪印象を与えてしまう可能性が高い。それは、ルカにとって一生影を落とす傷になってしまいうだろう。

そんな影を落とす選択肢が、ルカにばかり痛みを押し付けるような発想が、正解なわけがない！

間違えるな、私。これ以上間違えることだけは絶対にしてはいけない。間違えて、ルカを傷つけてもしたら……その時は本当の本当に、私はルカの友達失格になる。

だから、正しい行動をとろう。たとえ自分がその選択で苦しむとしても、それは自業自得。すべてを受け入れよう。

「あの、私………ごめん。水に揺られてたせいかな、酔っちゃって、気持ち悪くて」

「気持ち悪くて、プールから飛び出すの？」

「そ、れは……」

ああ、やつぱりだめだ。誤魔化し切れない。

……やつぱり、本当のことをルカに説明すべきなんじゃないかな。私の頭の中で、その選択肢が脳裏をよぎった。

だって——このまま全てをルカに秘密にしているのは、あまりにも不義理だ。全部伝えて、それでルカに全ての判断を委ねよう。拒絶されても、それがルカの選択なら受け入れよう。それが、私にできる償

い、

……………なの？

そこまで考えて、ふと私は自分の思考に疑問を持った。

だって、相手はルカだよ？ 全て伝えて……………もし仮にルカが『騙された』と思つて、わたしのことが嫌いになつたとして……………嫌いになるまではいかなくても納得できない気持ちを感じたとして……………それをすぐ態度に出すような子だろうか、ルカは。

ルカはあれで優しいし意地っ張りなところもあるから、心の中では何か思うところがあつても、黙つてそれを飲み込んでしまふんじゃないだろうか。

それつて、ルカのためになつてゐるだろうか。

ルカばかりが嫌なものを抱えて、私だけがすべてを吐き出してすつきりした気持ちで過ごすなんて……………それこそ、ルカに痛みを押し付けてゐるんじゃないだろうか。

それに、ルカに判断を委ねるといふのもいかにも無責任だ。だってそれつて、ルカに『許す』か『許さない』か、言つてみればこれまで友情を捨てるか残すかの選択を強制してゐるつてことですよ。ルカからすれば私は、『セツナ』は掛け値なしに今まで一番長い間過ごしてきた友達で、それだけ長い間はぐくんできた友情を人質にとるような、卑怯な手じゃないだろうか？

「……………」

言えない。私だけが楽になつて、ルカに辛い部分を押し付けるような選択は選べない。

でも、かといつて言わないままでの、それではルカに拭いきれない心配な気持ちを押し付けてゐるだけになつてしまうわけで、それつて結局私が辛い思いをすることから逃げて、代わりにルカに辛い部分を押し付けてゐるだけではない。

……………

じゃあ私、どうしたらいいんだろう……………？

私だけが今までの報いを受けて、苦しい思いをして、いい思いをし

ないで、かつルカが幸せになれる、辛い思いをしなくて済む選択って……なんだ？ この状況で、私が選べる正しい選択肢って、なんだろう？

ルカを遠ざけようとするのもダメ。

ルカに真実を隠し続けるのもダメ。

ルカに真実をさらけ出すのもダメ。

だとしたら……後残された選択肢って、なんだろう？

私は、正しい選択をしなくちゃいけない。これ以上間違っちゃいけない。これ以上ルカを苦しませちゃいけない。たとえそれが自分が辛い思いをする選択だったとしても受け入れなくちゃいけない。もしもそれができなかつたら、私はもう本格的にルカの友達失格だ。分かってる。それがこれまでルカを騙し続けてきた私がしなくちゃいけないことだってことも、よく分かってる。

なのに、どう答えても、ルカを苦しませてしまう。私ばかりが楽になつてしまう。私がルカを楽にしなくちゃいけないのに、自分の負債がルカにのしかかってしまう。

どうすれば……どうすればいい？ どうすれば、どうすれば、どうすれば、どうすれば……

……ああいや、前提が違うのか。

もう、ルカを一ミリも傷つけさせないで事を収めることって……無理なんだ。

だって私は、もう既にルカの友達失格だったんだから。

あの日、あのパビリオンで、自分の都合を優先させてルカにお別れを伝えられなかった時点で。

ナナみために『また会おう』って、そんなふうに未来に希望を託すことができなかつた時点で。

私という人間は、ルカの友達には相応しくない存在だったんだ。私って……

の の の の の の
その12：おねがい

の の の の の の

——セツナは、それからじつと固まってしまった。

わたしは、こういうのを見たことが何度かある。セツナって考え事をするとき周りのことが見えなくなっちゃうところあるから。あと熱中したときもね、すぐに周りが見えなくなる。だから今も、考え事に夢中で、ほかのことができなくなってるんだと思うけど。

……正直わたしは、後悔していた。

本当はもつとじっくりやっていくつもりだった。

セツナが自分のことを許せるようになってから、あの日のことは思い出の箱から取り出せばいいと思ってたから。

わたしは、セツナもブランコも、どっちのあの子ども大好きだったから、それでよかったけど……セツナにとっては、そうじゃなかったのね。

最初は、恥ずかしがっているだけだと思ってた。

初めのホームルームで声をかけられたときは、正直分からなかったけど……わたしに声をかけてきたときの雰囲気とか、すぐ調子に乗る性格とか、話しているだけですぐにセツナが『ブランコ』だって、わたしは分かったた。

だってわたしも、セツナと同じだったから。

セツナに会いたくて、あの日のことをずっと忘れないでいて、セツナと会うためにじゃぱりあかでみーに入っただけだから。

最初は、相手がブランコだってわかった時点で、昔のことを話してみるのがもったいだった。でも、かばんさんが『もしセツナさんが自分から昔のことを言いださない場合は、待ってあげてください』って言うものだから……その通りにした。

そうしてセツナの様子を見ていたら、かばんさんが言っていたことの意味がわたしにも分かった。

セツナは、ずっと自分のことを責めてた。

それでいて、わたしとおともだちになりたいって思ってた。

そんなときにわたしが自分から昔のことを話したら、たぶんその時はセツナもすつごく喜んでくれると思うけど……たぶんまた、自分の

ことを責めだすと思う。今みたいに大変な感じじゃないと思うけど、ずっと心の中でちくちくと。『今の関係はルカがやさしかったから成り立ったんだ』……みたい。私はそういう感じになっちゃうのがすごくいやだったから、言わないでおくことにした。

多分かばんさんは、セツナがそんなふうになるのを止めるためにあ言っただと思う。

だから、事情を察してくれたらしいアンを仲間に引き込んで、セツナが自分のことを許せるようになったら、そのとき昔のことを話そうと決めた。別にわたしは、それまでセツナとして『だけ』のあの子と一緒に遊ぶのも苦じゃなかったし。

ただ……ナナの方にはまだ、さすがに話してなかったから……。

あそこであんな風にナナとアンのことが分かるとは、考えてなかった。自分のやっていることが間違ったことだとはぜんぜん思ってたけど、でもこうしてセツナが苦しんでるのを見るのは、つらい。

「……セツナ」

「——あつ！ ええと、ルカ、ごめ、ごめん、ごめんなさい！ 理由は言えないけど、ええと………違うそうじゃない、それじゃ意味がない。正しいことを、私は……」

「セツナ！」

強く呼びかけると、セツナはようやくわたしのことを見てくれた。

そしてわたしは、セツナにこう言う。

「この間の『お願い』、使ってもいいのよ」

ほかん、とセツナはそう表現するしかないくらい意表を突かれた表情を浮かべていた。でも、それも一瞬のこと。すぐにすごい形相で私の言葉を否定にかかった。

「だつ！ ダメだよ!! これ以上！ ルカに……そんな！ ただでさえルカにばかり苦しい思いをさせ、」

「誰が、苦しいの？」

……違うでしょ。

「わたしは、苦しくないわよ。今まで一度も、セツナと一緒に過ごしてきた苦しい思いをしたことなんてない。本当よ、嘘じゃないわ」

苦しいのはセツナ自身でしょ。

自分がこれ以上ないくらい辛くて苦しいから、揺れている水面の月がゆがんでしまうみたいにな……一番近くににいるわたしも、苦しんでい
るように見えちゃってるんでしょ。

「だから、もういいのよ」

そう言っただけは、セツナのことを力いっぱい抱きしめた。

もともと隠し事なんて苦手なくせに……変に隠し事しようとしても。正しいこととか、わたしを苦しめないようにとか、そんなこと考えなくたって、いいから。

「正しいとか……自分勝手とか、そんなのわたし、分かんないわよ。パークじゃそんなこと気にしたことなかったし。別にいいじゃない、正しくなくても、自分勝手でも。正しくなくて自分勝手なくらいで、わたし、怒ったりしないわ。だってセツナは、わたしのおともだちなんだから」

「……私はこんなに浅ましくて、醜くて、どうしようもないのにな？」

「どういう意味がよく分かんないけど、たぶん全部間違ってると思う。セツナは良い子よ」

そう言いきったら、セツナは静かに泣き出した。

そうしてひとしきり泣いて——そして、こう言った。

『『お願い』だから……っ……わたしのことを、きらいにならないで』

——まあ、どんなお願いにしても、答えは決まってるんだけど。

「わたしがアンタを嫌いになったことなんて、今まで一度もないわよ」

その13…さよなら

おねがい。

そう言われたときに私の胸に去来したのは……『わたしを嫌いにならないで』という、そんな言葉だった。

……笑ってしまう、と自分で思った。あれだけルカのためルカのためと言っておいて、結局最後に出てきたのは……そんなちっぽけで情けない欲望だったのだから。

でもルカは……そんなちっぽけで情けない欲望を、受け入れてくれた。多分、ルカ自身どういう意味でのお願いなのかは理解していないと思う。でも、ルカがそう言ってくれただけで嬉しかった。この醜い私の全てを、ルカが許してくれたような……そんな幸せな錯覚を抱くことができた。

「……私はね、ルカ」

それで、決心がついた。

私は、ルカの友達失格だ。

これから、ルカを傷つけてしまう。そのことは全て承知の上で——
——それでもなお、恥を忍んでルカのためになる決断をしよう。

過去のことを、全て話す。きつとルカは許してくれると思う。あんな前振りをしてしまったあとだから。

だから——許されて満足してはいけない。きつとルカの心のどこかには、わたしに捨てられて傷ついた気持ちがあるはずだ。それを絶対に癒す。友達失格だとしても、どれだけ浅ましくても、それだけは絶対にやり遂げないといけない。

ルカのことを傷つけた分、この先一生全てを使ってでもそれに見合う幸せを、ルカに感じてもらわないといけない。

それが、『友達失格』の私にできる唯一の償いだと思う。

「私は——ルカと出会うずっと前に、ぱびりおんで、ルカと出会ったんだ」

「うん。知ってたわよ」

……だよね。知ってたよね。きつと裏切られたって思うよね——

——え？

「……………ん、んん？」

「だから、知ってたわよ。入学式の日には気づいてたにきまつてるじゃない。だってわたしも、セツナに会いにじゃぱりあかでみーに来たんだから」

……………待って、頭が混乱してる。ルカはいつたい、何を言ってるんだろう？ 知ってた？ なんで？ いやだったら何でそう言わな……………え？ どういうこと???

「……………ごめんね、ほんとはすぐにも言いたかったんだけど、」
「謝らないでっ!!」

よく分からないまま、私は本能的にそう叫んだ。

「ルカがどうして私だって気付いてたのかは知らないし、それを黙ってた真意も分からないけど……………謝らないで。悪いのは全部私だから。ルカが悪いことなんて、これっぽちもないんだから!」

「だからそういう話をしてんじゃないのよこのおバカ!」

「いたあ!」

る、ルカが……………ルカが私のことぶったあ!?

「ほんとに放っておいたら無限に辛気臭くなるわねアンタ……………。わたしが言いたいののはね、アンタがブランコだって入学式のと時から分かってたけど、わたしから言い出したらきつとアンタ、そのことをずっと気に病むだろうから言わなかったってことよ! どう!? 当たってるでしょわたしの読み!」

「う……………」

た、確かに……………。もし入学式当日にルカから正体を言い当てられたら、たぶんその場では喜んだと思うけど、いずれルカを捨てたくせにルカに救ってもらった……………みたいなことを考えるようになってたと思う。

……………いやでも、今の時点でもルカを捨てたくせにあらゆる精神的なマイナスをルカに救われてしまっているような……………むしろ入学式当日に言われるより負債が大きく……………。

「またなんか考えてるわよね」

また人差し指に力を溜め始めたルカを見て、私は心を無にすることに決めた。

「つていうかね、アンタはあの日——ぱびりおん最後の日、わたしのことを『放って行つた』つて思つてるみたいだけどね……………それ、違うから」

ピツと、溜めた力を抜いた人差し指で、ルカが私のおでこを突いた。「ラツキービーストがね、わたしに教えてくれたの」

……………ラツキーが……………？

——!!!

その瞬間、私の脳裏に幼少の頃の記憶がフラッシュバックした。

「ねえ、お願いだよラツキー！もしこのまま一緒にいられないなら……………せめて、直接ルカに会つてお別れを言わせてよ！このままなんてやだよ！さよならも言えないなんてやだよ!!」

『ア、アワワ……………ゴメンネ、ゴメンネ、ルールダカラ デキナインダ。ゴメンネ』

「なんで……………なんで!? ルールつてなんなの!? そんなに大事なことの!? ひどいよ! ひどいよ!!」

『ゴメンネ、ゴメンネ、ゴメンネ、ゴメンネ……………』

……………あの時の……………愚かだったことまの私の言葉が……………。「ルールだから、パークのお客さんをフレンズと会わせることはできない。……………でも、言葉を伝えることはできる」

詭弁だ。

バカな私でもわかる。そんなの詭弁だ。だって、ラツキービーストはフレンズとの干渉を許されてない。干渉可能なのは、ヒトに危害が加わりそうな緊急事態のみ。それなのに、ラツキーは、あんなひどいことを言った私のことを……………。

「らしいわよ。お陰でわたしは、ブランコのお別れの言葉きよなを聞けたんだけど。でもアンタは、ずっとわたしからの『さよなら』を聞いてなかったのよね」

泣き崩れた私の前に屈み込むようにして、ルカは私に視線を合わせ

てくれた。そして私の目じりに浮かんだ涙をぬぐって、こう言ってくれた。

「さよなら、ブランコ。わたしと遊んでくれてありがとう。……本当に本当に本当に、楽しかったわ。またいつか、会いましょう」

「……………っっ!!!」

止まっていた私の時計の針が、未来へ進み始める音がした。

ののののののの
その13:30なら
のののののの

「で、久しぶり。……よーやく会えたわね、ブランコ」

「……………うん。そうだね、ルカ」

ああ、なんだか本当に久しぶりに……………久しぶりにルカと会えた、そんな気がする。

「ま、わたしは全然久しぶりって感じてないけどね。だってセツナってば緊張するとすぐわたしのこと呼び捨てで呼ぶんだもの」

「え!？」

そ、そうだったの……………? ぜ、全然気づいてなかった。完璧に隠せてると思ってた……………。っていうか入学初日の時点で気づかれてるあたり、わたしって本当に隠し事できないんだな……………。自分で全然自覚なかった。

私ってひよつとすると……………勉強と運動以外本当にダメダメな人間なのかもしれない……………。うすうすそうなんじゃないかとは思ってたんだけど……………。

「そういうところが可愛いんだけどねー」

「か、可愛いとか……………ルカ、あんまりそういう他の人には言っちゃだめだよ。あと呼び方はセツナなんだ」

「んー、どっちでもいいんだけどね」

ルカは本当にどうでもよさそうに、

「わたしにとってはブランコもセツナも、同じだから。でもブランコ

よりはセツナの方が響きがかわいいでしょ？ わたしもね、ほんとはサーバルキャットが名前なんだけど、それだと響きが可愛くないじゃない」

「確かに……」

人間にしてみれば、ヒトって名付けてるようなものだもんね。

「だから、縮めてルカ。これならかわいいでしょ？ セツナも同じよ」
「ヒトの名前はかわいいかわいくない以上の意味があるんだけどね……」

まあ、うん。

「でも、ルカがそう言うんなら、いいか」

正直、今までは自分の名前より、ブランコって名前の方が好きだった。だって、ルカにつけてもらった名前だから。

でも……今はセツナでもいいかなと思ってる。だって、ルカに可愛いって言ってもらった名前だもの。

「あー……そういえば、ラツキーにもお礼を言わないと、なあ」

今の私がいるのは、掛け値なしにラツキーのお陰だ。ラツキーがいなかったら、ルカにさよならを伝えられていなかったら……『わたしとルカのパビリオン』を終わらせることはできなかった。私の心は、いつまでもあのパビリオンの中にいたと思う。

「そーねー。まあアイツら情報は全部やりとりしてるらしいし、プールにいるヤツにお礼を言ったらみんなに言っちゃったことになるわよ」
「そうだね。じゃあ、そうしようかなあ……」

「ってことで、まずプールに戻らないとね。アンとナナにも心配かけちゃったし」

「あ」

そ、そうだった……！ あの二人にも今まですっごい迷惑を……！
「だから、そこで自分を責めるのはナシね」

あう。

勢いよく立ち上がろうとしたところで、ルカのチョップが私の頭に宛がわれてしまった。うう……心を読まれてる。そんなに分かりやすいかな私……。

「セツナはさ、自信がなさすぎるのよ。もつと自信もつていいのよ？ そりゃわたしだって迷惑だけかけられてたら怒ることもあるけど……それだって怒るだけで嫌いになるわけじゃないし。ましてセツナは、ちよつとくらい迷惑かけたって怒られないくらい、みんなのためになることをしてるじゃない」

……ためになること……？ そんなことしてたっけ。あ！ そうか、勉強方法は教えた。

「すいみんがくしゅーのことだけじゃないわよ？ アンとナナを引き合わせたのはアンタじゃない。アンタがいなかったら、あの二人は昔のことを思い出すこともなかったのよ？」

それは……。

「セツナが気付いてないだけで、セツナは皆に必要とされてる。だからもつと自信を持つてよ。わたし、嫌だからね。わたしの親友が事あるごとに悲しい顔するの」

………！

「……頑張る。すぐには、無理かもしれないけど……」

私には、ずつと友達と呼べる存在がいなかった。

学者の両親に育てられて、本が好きなお子だったと思う。子供の頃からずつと本を読んでいたから話が合う学友もいなくて、それでクラスから浮いて……人の目を気にするようになって、いつしか他人に気を遣いながら話すことも苦痛になっていって、人付き合いそのものに苦手意識を持つようになった。

でも、生まれて初めてパビリオンという場所で、そんな私とでも楽しく遊んでくれる存在に出会って。

本当に、救われたんだ。私でもいいんだって。友達になってくれるんだって。

パビリオンが終わった後は、三年後のリユニオン計画のことだけを考えていた。どうにかしてパークに長期滞在できる資格を手に入れて、そしてルカと再会することしか考えていなかった。その間通っていた学校のことなんて大して覚えてないし、今となっては校長先生の名前すら曖昧になっている。

そんな私だから、自分に自信がないと言えば、それはその通りなのかもしれない。

今の私は、生まれて初めてルカに認めてもらった幼い子供と大差ないのだから。

でも。

「……いつか絶対、自分に自信が持てるようになるよ」

考えてみれば、それで十分のような気もする。

こんなにも私のことを想ってくれる友達がいる。それだけの事実があれば、私という人間の価値を認めるのに十分すぎる根拠じゃないだろうか。

「だって、ルカがそう言ってくれてるんだもんね！」

「……まあ、先は長そうだけどねー」

笑みを浮かべる私に、ルカは呆れたような笑いを返しながら言う。そうかな？ 私はもう、自信に満ち溢れてるんだけどね！

「あー！ セツナーー！ ごめーん！！ 私！ 私！ 何も知らなくてー！！」

と。

そこで、プールから飛び出してきたナナと鉢合わせた。ナナは顔がぐちゃぐちゃになるくらい泣きべそをかいていて、それはもう酷い顔で……。こんなに涙を流してくれる友達が、私にはいるんだもんなあ。

「ううん。いいの。わたしこそごめんね、ナナ。……もう、大丈夫だから」

「んー、イイネーイイネー。ところでルカ、もうちゃんづけはいいのーかー？」

「……うんまあ、ひとまずは、ね」

アンも、なんだか色々と気をまわしてくれていたみたいで……。本当に頭に上がらない。

正直、もらったものが大きすぎて……。本当にそれに見合うだけのものを渡せているのか、今も少し不安ではあるけど。

でも、不安を抱えながら、少しずつ前に進んでいこう。

「——ああそうだルカ。話したいことが、いっぱいあるんだ。あの日からずっと……ざっと三年分くらい！」

「えええセツナ、ちょっと待ってよ長くない……？」

「短くまとめるから大丈夫。あと、ルカがどうやってリユニオン計画に参加したのか、そのいきさつも聞きたいし……」

まずさしあたっては……とびきり長い近況報告から。

その0. 1へ—18:これから

「ほんとはよかったの？ かばんちゃん」

眼前に広がる巨大な結晶の山を見下ろしながら、そのレンズは傍らに立つ少女にそう問いかける。

赤と青の羽根飾りをつけた帽子をかぶった少女は、こくりと頷いた。

「うん。きつとこれでよかったんだよ。過去を変えても、ボクたちの生まれたジャパリパークに起きたことが変わるわけじゃないけど。でも、無数にある世界に『ボクたちによって救われる世界』を作るってことには、きつと意味があるから」

「うーん……かばんちゃんの言ってることはたまに難しすぎて、わたしにはよく分かんないや」

彼女たちが見下ろす結晶の山は——よく見てみれば、巨大な『穴』を塞ぐ形で存在していた。あるいは……塞いでいるのではなく、『穴』から噴き出た『何か』が自動的に結晶へと変換されているのか。

それを示す事実として、結晶の山の頂上はぼろぼろと穏やかに崩れ、そして虹色の粒子となつて空高く舞い上がっていた。きつとそうして、『穴』の中からやつてきた『何か』は輝く粒子として世界中に飛び散つていくのだろう。

「……いずれ世界中が、ジャパリパークのようになっていけたら、それが一番いいんだろうけど」

そんな粒子を名残惜しそうに見つめながら、少女はゆっくりと右手を掲げる。

「でも、世界にはいろんな思いがあつて、みんながみんなジャパリパークの中のように幸せになれるとは限らないから」

だから、と少女は呟き、

「ごめんね、このままなら生まれるであろうみんな」

直後、空中へと舞い上がっていた光の粒子が、残らず少女の手の中へと吸い込まれていった。

ほとんどおとぎ話の中の光景だった。

そして少女が輝く右手を振るうと、今度は結晶の山を覆うようなドーム状の建造物が作り上げられる。

それで、全てが終わった。『何か』が這い出てくる『穴』も、それを塞いだ結晶の山も、ドームの中の限られた空間の中だけの話となった。すべての悲劇の芽は、終わる前に潰された。

万物の霊長。

その化身たる少女が成し遂げた、文明開闢以来最大の功績だった。

「……サーバルちゃん、ごめんね。ボクのがままに付き合ってくれて」

「いいよそんなの！ わたしもかばんちゃんと一緒に旅したいし！

かばんちゃんと一緒だと楽しいもん」

「でも………でも」

少女の表情は、今にも泣きだしそうなくらいの悲しみを帯びていた。

「きつとボクはこれから、長い間この世界で過ごすことになると思う。やらなきゃいけないこともあるから旅はできないし……分岐してしまったこの世界から、もとのジャパリパークに帰る手段を手に入れるには時間がかかりすぎるもの。そもそも本当に帰れるかも……」

「もう！ かばんちゃんはすぐそうやって〜！」

うつむきがちな少女に、そのフレンズはむつと頬を膨らませて、それでいて励ますように続ける。

「言ったでしょ、かばんちゃん。ずっとずっと、ついていくよって！」

そんなに気にしなくていいんだよ？ わたしにとっては今も旅みたいだし」

「……ありがとう、サーバルちゃん」

その言葉に、うつむいていた少女は顔を上げ、そしてようやく笑みを浮かべて見せた。

「きつと、帰れる方法を見つけてみせるよ。他にも色々やらなきゃいけないことはあるし、きつと時間もかかるけど……これからもよろしくね」

「うん！ こちらこそ！」

し、セツナはそのままジャパリパーク中央研究所に、そしてルカはそのお手伝いのフレンズとして共に人生を歩んでいる。

偏屈で未熟だった少女は今や、研究所の主任に。天真爛漫なだけだったフレンズは、いつしかそんな彼女を支えるしっかり者に。——もつとも、少女の未熟だった人間性は今も形を変えて残っているし、ルカ含め様々な周囲の協力者たちに助けられてようやく立てているような有様だが。

だが逆に言えば、彼女は誰かの助けを素直に頼れるようになった。それは、自分だけで全てを片付けようとして潰れかけていたあの日の幼さからの、確かな成長だった。
なお。

ルカの方は相変わらずではあるものの、昔に比べて色々と遠慮のなくなったセツナのダメっぷりに振り回されることが多くなったようである。合掌。

——同じくらいだった背丈はいつの間にかセツナが追い越し、今や二人は傍から見たら年の離れた姉妹のようだった。

「……あ！ やつと来たあ！ セツナもルカも遅いよ〜！」
そんな二人を遠目に発見して手を振るのは、彼女たちの一〇年来の親友でもあるナナだ。彼女も（なんとか）ジャパリアカデミーを卒業し、今はジャパリパークのフレンズ専属飼育員として元気に働いている。なんでも今は、キタキツネやチーターなどを兼任しているのと。クセの強いフレンズの担当を兼任するのはかなり大変らしいが、彼女は持ち前の人懐っこさでうまくフレンズたちとやっていけるようだ。

そんな彼女の傍らには、今日はそれらのフレンズではなく、灰色の長髪を持った童女の姿をしたがいた。

「セツナが悪いのよ！ セツナの日だっていうのに……」
「ごめんごめん」

「ナハハ、セツナのそれは多分一生治らないだろーなー」

灰髪のフレンズ——アンの鋭い一言はさすがにぐさつときたらしく、気持ちしょんぼりするセツナである。彼女は今やパークにいる同

種 of フレンズに『アイドル』の概念を伝え、一部のフレンズからは『ジャイアントペンギン』という『先輩のけもの』であることも手伝つて『ジャイアント先輩』と呼ばれているらしい。

アンという名前と呼ぶのは、此処にいる面々と——あとは、理事長と彼女たちの担任をしていたミライくらいだろう。

「——あ、皆さん集まってるみたいですね」と。

そこで、少女の声が聞こえた。その場に集まった彼女たちにとっては耳慣れない——それでいてどこか馴染みのある声の主は、

「理事長先生！」

ボロボロの帽子を被った、赤いTシャツの……少女だった。

現れた彼女は、入学式の日壇上に立ったその姿の面影を残しつつも、明らかに若返っていた。いや——あるいは彼女たちフレンズにとって、見た目の姿かたちを変えることは必ずしも不可能ではない、といったところか。

たとえ姿が少女そのものでも、彼女たちにとってはかけがえのない恩師以外の何物でもないのだが。

「皆さん、今日はわざわざ集まってもらってありがとうございます」
ぺこり、と理事長——かばんは集まった彼女たちに頭を下げる。その傍らに、彼女と共に過ごしてきたサーバルキャットのフレンズはいなかった。

「ああ……サーバルちゃんとかつちの世界のミライさんは、ちよつと先に行ってもらってます。ボクが行くついでにこつちの世界のミライさんをこつちに戻さないといけないので、ちよつと大変ですけど……」

「大丈夫なんですか？ 理事長先生……『おまもり』の効力だつて……」

「大丈夫です、『穴』からの供給がまだ生きてますから。あと一回使えば多分切れてしまう程度だと思いますけどね。四神の力なしに時渡りができるんですから、それでも十分ですけど」

「それは……」

言つて、ナナは言葉を詰まらせる。

かばんは——かばん達は、そもそも此処とは違う未来を辿つた世界からやってきている。彼女たちの目的は世界の救済そのものというより『世界が救済される可能性』を増やすことらしいが——それはともかく。

世界を隔てるということは、そう容易に行つたり来たりできないということだ。つまり、今彼女が元の世界に帰れば。

「お別れ、です」

救世の少女は、寂しそうな笑顔を浮かべながらそう答える。同時に、涙を見せない少女の背後で極彩色の『裂け目』が、涙滴が落ちるように音もなく広がった。

その場にいたかばん以外の全員にとつては初めて見る景色だったが、それでも本能的に理解できる。あれが『帰り道』なのだ。そこをくぐれば、彼女はまた、彼女の旅路へと戻るのだと。

「かばんさん！　ありがとうございます……さよなら。わたし、アナタのお陰でセツナと……」

「うう……もうお別れなんて寂しいですよ……」

「……ししし。そっちのわたしにもよろしくなー」

「先生。……ありがとうございます」

この一〇年はきつと、ほんの偶然でしかなかった。

長い長いかばんの旅路と、自分たちの旅路がたまたま重なっていただけ。彼女の旅路は、きつとこれから先もずっと……続いている。

「はい！　皆さんならきつと……この世界を今よりよくしてくれと信じています。ボクが作つたりゆにおんを巣立っていった皆さんですから。頑張ってくださいね！　——じゃあ、さようなら」

そう言つて、かばんは四人に背を向ける。

後ろを振り返ることは、もうしない。かばんはもう、次の旅路への一歩を踏み出しているのだから。

「——また、いずれ」

その後ろ姿に、セツナはぼそりと声を掛けた。

聞こえたのか聞こえていないのか、かばんはついに振り返らなかつたが――。

セツナは、その小さく偉大な背中に自分の声が届いているだろうと信じていた。

ののののののの

「……セツナ、またいずれってどういうこと？」

小さな英雄を見送り、ミライを出迎えたそのあとで。

目じりに残る涙を拭いながら、ルカはセツナの最後の言葉の真意を問うていた。かばんの持つ『おまもり』に蓄えられていた力はもはやなく、『穴』のない世界ではサンドスターの莫大な供給も見込めないとすると、もはやかばんとの『再会』は叶わない。そう考えるのが普通だ。

そう言いたげなルカに対し、セツナはなんてことなさそうに答える。

「んー？ いやあ、先生が時間移動できたってことは、私たち人間だつてやろうと思えば移動可能ってことでしょ？ SSプリンタみたいなものもあるし、不可能じゃないと思うわけだよ」

とんでもない理屈だった。

確かにサンドスターの万能性を考えれば不可能ではないのかもしれないが、それにしたって時間旅行どころか分かれた世界同士の移動である。できないことはないのかもしれないが……それはほとんど、賽の河原で石を積み上げて軌道エレベータを作りましようと言っているのと同じ難易度だろう。

「えー……いつになるかしら？ きつと達成する頃にはおばあちゃんだと思わよ？」

「ん？ 私はおばあちゃんにはならないよ？ 何言ってるんのルカ」

苦笑いしながら言うルカに、それこそセツナは心外そうな表情を浮かべてこう切り返す。

「私、ほどほどのところでフレンズ化するから。ルカを残して死んで

悲しませたりしたら、友達失格だもんねー」

当たり前のように。

ヒトの身を捨てると、セツナは宣言してみせた。

他人を頼ることを覚えたとか、少しは人間的にまともになったとか言っても、結局セツナはセツナである。究極的に、セツナはルカさえいればいい。そういう人間だ。そして一〇年前のあの一件から、ルカもそう思っているのだと信じていることができるようになった。

「……………アンタ、ほんとにねえ……………」

……………もつともそれは別に自惚れでもなんでもないので、ルカも苦笑するだけなのだが。

明らかに歪で、倫理的に考えればきつと褒められた人間性ではないだろう。見る人が見れば、眉を顰めるような人格だろう。

だがそれでも、彼女たちはきちんと幸せになれた。そしてあるいは、これからも。

「そのうち二つの世界が、自由に行き来できるような未来が来たらいいねえ」

「それはそれで問題ありそうね……………」

ヒトとサーバルキャットが『再会』するための物語は、此処に幕を下ろした。

これから始まるのは——二つの世界が『再会』する為の長い長い物語だ。